
Sky Soul

空島光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sky Soul

【NNコード】

N8184L

【作者名】

空島光

【あらすじ】

戦いに呪われた月族 一人の少女 レイ と龍の物語。

少女は戦いを締結させるために、仲間とともに天空城へと立ち向かう。

仲間とギャグも交えながら、敵ボス、少女 マナ を倒しに行く。

序章

天空城編

登場人物

レイ・ホープ　主人公。十歳の銀髪の少女。月族。

キバ　忍者。十九歳の黒髪の男。ティラといつも行動している。

ティラ　ローブを着た子。八歳の金髪の男の子。

ミルト　白い光の龍の子。

レアン　双子。十八歳の金髪の男。目が紅い。
カノン　双子。十八歳の金髪の女。目が紅い。

マナ　天空城のボス。十歳の茶髪の少女。
リム　マナの秘書。十七歳の赤毛の女。

ギーム　謎に包まれた男。十七歳。

ヴァッシュ　天空城の新米。十六歳の青髪。

この世界・・・

フロウテギナガスル

天空城フロウテギナガスルという名の団体が支配する世界。
ほとんどの人がその団体を支持するが、一部、くらい闇の世界があつた。

それは　呪われた月族。

天空城の闇の部分は彼等、月族が何でも知っていた。
だが、希望は絶たれた。

天空城に、月族は滅ぼされた。

呪われた月族の名は、時が経ち人々から忘れ去られていった。

一部をのぞいて

・・・・お前だけが、最後の希望だ。

序章 出会い

一 ミルト

空には夕日が浮かんんでいる。

気持ちが悪いくらい、真っ赤だ。

私は高く茂った枯れ草に隠れていた。

辺りは犬の鳴き声がする。

この草原の中にいると私は確実に死ぬ。

私は草原の向こうの森に目をむけた。

森の中に逃げれば、見つけにくくなり犬に噛まれた傷も癒せる。

(私は・・・・・まだ、死ない。)

自らにそう言い聞かせた。

静かになつた草原の中、私の心臓の鼓動が聞こえる。

不意にパンッという銃声の音が草原に鳴り響いた。

鳥が一斉にバサバサと羽の音を響かせながら飛立つた。

パンパンパンと連続で銃声の音が聞こえ、飛んでいた一匹の鳥が悲しく墜落した。

あの弾にはあたつてはならない。

龍の血が穢れてしまう。

(あの時はバカだった・・・・。)

私はなぜこうなったのかをゆっくり思い出した。

* * * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

私が村の隅で村の人々の話を聞いていたときのことだ。

私は村の裏に茂る甘い果実をのんびりと食べていた。

このときは飢えていてしようがなかつた。

私は果実を食べながらおろかな人間どもの話を、耳をすまして聞いていた。

「龍の気を感じます。」

白いローブを着た女の人が言つた。

私は食べるのをやめ、じつとした。

(きづかれたのか・・・?)

「龍は高く売れるぞ。そして、戦力にもなる。ゆくのじゃー賞金稼ぎよ。」

白いひげを長く伸ばした、村長らしき者が杖を振り上げた。

賞金稼ぎは3人いて、一人が中年の男、もう一人が中年の女、もう一人が年は10くらいの少女だった。

少女には並々ならぬ殺氣があつた。

中年の男と女よりも秀でている。

白ローブの女は、聖魔導を使つて龍の情報を集めた。

「白き龍の子のようです・・・・この世で無敵と呼ばれる光の龍・・

・。あとは不明です。」

「わかつたか。レイ。」

中年の女は言った。

「了解です。」

と少女はこたえた。

少女は古稀使われているようだつた。

私は静かに思つた。

(国の大・・・・か。哀れだな。)

「いぐのじや！…」

村長らしき者が言つと賞金稼ぎは「せつ。」と言つて、音もなく砂煙だけを残して消えた。

私はわれにかえつた。

（弾・・・・あのいやなにおい・・・あれには触れてはならない。）
私は同時に恐怖と興奮を感じた。

これは武者震いではない。

ただの恐怖だ。

（怖い・・・・怖い、怖い、怖い！）

その時、私には冷静さが無かつた。

頭の中で飛ぶと撃たれることなんて、わかつていたのに。

私は我を忘れ、気がついたときにはもつ・・・飛んでいた。

目の前に中年の女が不意に現れた。

中年の女はあの鉛の玉を撃つてきた。

鉛の玉は私の体すれすれに空気を切つた。

今度は中年の男が、魔法銃をかまえた。

私は鋭くとがつた牙を剥き出し、炎を吐くぞと威嚇した。

・・・しかし実際には吐けなかつた。

光属性の魔法なら何でも使えるが、威力がありすぎてこの村を丸焼きにしてしまう。

（血はみたくない・・・・・）

そしてその一瞬のスキに弾を一発入れられてしまつた。

スローの映像を見ているようだつた。

「残念だつたな。白き龍。」と中年の男が言つた。

（これで終わりなのか・・・・・）

あたると思った瞬間、地面から不思議な力に引き寄せられた。

（なんだ！？）

不思議な力で、翼が制御不能になつた。
ドスンと鈍い音がし、地面にたたきつけられる。

（くつ・・・・・！）

尻尾にひどい激痛が走る。

尾から血が滴り落ちた。

真っ白な尾は血でぐどい桃色に染まっていた。

そして今、ここにいるのだ。ただ広いだけの灰色な草原に。

私は目をつむり、耳を澄ました。

目をつむれば、神経が研ぎ澄まる。

犬の唸る声がする。

周りに一匹。

中年の男のにおいがする。

どうやら飼いならされているようだ。

私は目をかと目を開いた。

今ならわかる。犬がどのようなステップで自分を殺りに来るのか。

(私は、死はない！)

私は最後の力を振り絞った。

私は前につっぱしるように見せかけた。

もちろん、つかまるわけがない。

犬が一匹両脇から、襲いかかってきた。

犬は目が充血し、口からよだれを垂らしている。

狂氣の犬だ。飼い主によく似ている。

私はフツと微笑みを浮かべた。

私が左にフェイントをかけると犬どもは左にとんだ。

私は右にステップをふみ、さらにとびかかってきた犬を踏み台にして、空へと舞い上がった。

今の私に弾など、当たらぬ。

私は一声ほえると森へと急いで向かつた。

何分か飛ぶと森に入つた。

セントラル

私は草むらに倒れこんだ。
よほど疲れていたのか目をつむると、ぐっすりと寝てしまつた。

・・・私は夢を見た。

* * * * *

そこは戦場たゞた

大泡やミサイレ

力砲やミサイルの音が耳に響く

「ミルト。私のかわいいミルト。

絶対に動いたり、声を出したりしてはいけない。」

「母様…・・・・・？」

私はミルトが言つた。

二ノに前方に立場が不整いのを感じ耳一力

天空城の団体は危険だわ
ミルトが利用されてしまう。）

コーンはミルトを優しくなめた。

ミハヤシノミコト

(復讐してやる。・・・)

エリンは草むらから飛び出し、エリンはほえた。

そこで、一いの壇上からそれから置いたなかでた

ミルトは飛び起きた。息が荒くなつてゐる。

(はっ！・・・・・嫌な夢を見た・・・・・)

ミルトは周りを見渡した。人の気配は感じない。

(賞金稼ぎは追いついていないようだな・・・・・)

そのとき、後ろからミルトは強烈な殺氣を感じた。

(何い・・・・？誰かいるのか？)

ミルトは息を殺し、緊張して硬直した。

すると頭の中で声がした。

「残念だけど、君の心は・・・・・」

そして振り向くと賞金稼ぎの少女がいた。

ミルトに剣先を突きつけてくる。

「全てお見通しだ。」

(・・・・・！…)

二 レイ

ミルトはまだ、動けないでいた。

(殺される・・・)

少し時間がたつと、少女は言った。

「私に協力するきはない？」

ミルトは静かに少女の話に耳をかたむけた。

「私は呪われた月族。・・・この刺青が証拠。」

少女は巻いているターバンを少しずらして刺青を見せた。左目の下に淡い水色の零の形をした刺青が三つ彫つてある。左が一番大きく、右にいくにつれて小さくなつていく。

「月族は龍と心を通わす。龍の心、見ているもの、考へていること、全てが見える。それを聞いた天空城の団体はすぐ月族狩りにやつてきた。龍は戦力になるから。くやしいけど、月族は戦いの渦から、逃げられない。呪いみたいなもの。」

「私の年が七のときだつた・・・・・・・・。」

少女は目を伏せ、悲しそうな表情で語りだした。

三年前

「兄さんどうしたの？」

少女の兄は緊張しているのだろうか、窓の外を見て、固まっていた。
「奴が来た。天空城だ。そこに隠れていろ。・・・・・出てくるん
じやないぞ。」

兄の握り締めた拳が震えている。

「怖いものなしの優しい兄さんが、震えている・・・・。」

兄は少女の背中を押し、少女を見つけにくい隠し扉の裏に隠れさせた。

「絶対、出てくるんじゃないぞ。」と兄は小声で言った。

少女は隠し扉の隙間から部屋の様子をのぞいた。

入り口の扉が開き、誰かが兄を連れて行こうとしている。

兄の両手は紐で硬く結ばれ、この部屋を出て行った。

兄の右目の人にある、私と同じ形をした刺青が、きらりと虚しく光つた。

その光は涙だったのだろうか。

私は目をギュッとつむった。

目から大粒の涙がぽろぽろと、絶え間なくこぼれた。

「ごめんなさい、兄さん。私は弱いから助けられない。ごめんなさい・・・。」

少し時間がたつと、またドアの開く音がした。

最初は兄さんかと思ったが、兄さんはあんな乱暴な開き方しない。その誰かが入った後、たくさんの人人がドタドタと入ってきた。

少女は怖くなつて隠し扉が開かないように魔法をかけた。

人間達は何かを探している様子だった。

見つかならなかつたようで、くやしそうに地団太を踏む奴もいた。少し時間が経つと、人間達はバタバタと出て行つた。

かなり時間がたつた。

奴らはこの村から出て行つたようだ。

なにか焦げ臭い匂いがする。

嫌な予感がした。

怖くなつて、隠し扉から勢いよく出て行つた。

少女は大きく目を見開いた。

外を見たとき震えがとまらなかつた。

全てが燃えていた。

私は誰かいいかと必死にさがしたが、誰もいない。

少女はガクリと膝をついた。

頬から最後の涙が零れ落ちる。

そして思つた。

「なんて私は弱虫なんだろう。あそこは隠れていろより、みんなと一緒に連れて行かれればよかつた。」

とても、くやしかつた。

そして少女は誓つた。

「絶対みんなを助け出しに行くんだ。そして私は・・・絶対・・・強くなる！」

「もう、泣かない！」

少女の叫んだ声は誰もいない村に響いて寂しく消えた。

「そして兄さんは帰つてこなかつた。今は生きているのかもわからない。でも私は兄さんが、みんなが、生きていると信じている。私は兄さん達を助けに行くんだ。」

そういうつて、少女は話をきつた。

「もう一度聞こうか。協力しない？」

(・・・・・わかった。信じきったわけじゃないけど、一緒に行くよ。でも、私の復讐にも付き合つて。)

そう返事をすると、少女は小さくガツツポーズをした。

「その返事を待っていたんだ。私の名前は・・・レイ・ホープ。細い希望の光」

レイは嬉しそうにじつた。

自分の名を言うのに少しめらつたがミルトはこたえた。
(私はミルト。・・・・でも、あいつらはどうするの？)
ミルトは賞金稼ぎたちのことを思い出した。

レイは困つた顔をしてこたえた。

「・・・・残念だけど、おっさん達は倒さないとね。」

(・・・・・残念か？)

さりげなくミルトはつっこんだが、レイはその言葉を無視して話を続けた。

「その時は隠れてね。ややこしくなるから。」

(ええ。言われなくともそうしますとも。)

ミルトは木の根っここの小さな穴に隠れた。

何分か経つと賞金稼ぎたちが草むらを揺らして、やって來た。

(噂をすれば……だな。)とミルト。

「レイ、なにか見つかったか?」

中年の女が話しかけて來た。

レイは首を振り、背中に下げていい剣を手に取った。

「なんのつもりだ、レイ」と中年の男。

レイの顔が無表情になる。

レイは一瞬その場から消え、男の前に移動し、剣で肩を切りつけた。
レイは返り血を避けたが、頬にひとつ、ぽつんと男の返り血がついた。

レイはその血を手でぬぐった。

男は倒れて動かなくなつた。

ミルトは恐怖に顔がひきつった。

(一瞬だ……。)

「くそ! 何だと言うのだ!」

女は舌打ちして弓を三本引き、放つた。

三本の矢が弧を描き、空中を切る。

レイは一本よけたが一本は右の頬にかされた。
頬が摩擦熱でひりひりする。

もう少し右だと、刺さっていたかも知れない。

レイは頬の痛さに耐え、呪文を唱えた。

地面には青い光の筋の魔法陣が浮かび上がった。

古代の言葉が円状に浮かび、それを縁取るように円が描かれている。
ミルトにはよくわからない、月族のものであろう。

レイは呪文の唱え終わりに小さくボソリと何かをつぶやいた。

(呪文の名称なのだろうか……。)

すると辺りがまぶしく光った。

田がつぶれそうだ。

(まぶしい・・・。)

ミルトは思わず田をつむった。

田を開いたとき、そこにいたはずの、田の前の女は消えていた。

(・・・何があつたのだろうか。)

レイは剣についた血をぬぐい、鞘におさめ、何も無かつたかのよう

に近づいてきた。

レイは空を見上げた。

いつのまにか、夜になっていたようだ。

空にはいくつもの星が散らばり、大きな月は不気味に青白く輝いていた。

「きれいな星空だね。・・・・これでまた、兄さんに近づいたかな。」

「そういえば昔、兄さんがこんな」と言つていた。』

「いつでも笑つていろよ。」

どういう意味なのかはわからない。

なにが言いたかったのだろうか。

レイにとって、謎めいた言葉だった。

しかし、レイはいつも微笑む努力を重ねた。

ミルトは考えていた。

こんな怖い人間について行つても大丈夫なのだろうかと・・・。

コイツがもしも、邪悪なヤツだったら・・・?

私はどうなる?

死ぬにきまつている。

ミルトの自由はコイツに奪われた。

今、考へていることも全部聞こえているのかもしれない。

ミルトは身震いした。

半信半疑で付き合えれば・・・何とかなるかな。

「邪悪なんかじゃないよ。いつでも君の味方さ。たとえ君が敵になつてもね。」

とレイは言い、微笑んだ。全部聞こえていたのだ。
しかし、その微笑は決して邪悪なものではなかつた。

この一人の絆はやがて硬く結ばれた。

三 謎の人

ミルトは疲れのせいいかぐすりと寝ている。
尾にけがをしているのでよく効く薬をぬり、包帯を巻いた。
レイの魔法のせいで地面にたたきつけられ、傷ついた傷だつた。
「あの時は、ごめんね。重い傷だけど、君なら三日で治るはず。」
レイはあぐびをした。

「君を見ていたら、なんか眠くなつてきたよ・・・。今日はここで
野宿だね。」

このまま寝るとさすがに危険なので、レイは強力な結界を張つた。
これで雑魚敵だけは入れない。上級者の魔導師ならすぐにみやぶら
れるが、こんなところに来る奴なんていないだろう。

「おやすみ・・・。」

レイは草むらに寝転がつたまま、ぐすりと寝てしまった。

深夜。

紅月べじゆげを背景に丘の上に立つてゐる人がいた。
その人はじつとミルトたちのことを見つめていた。
ミルトたちの敵かどうか、わからない。
だが、敵だとしたら襲つてくるはずだった。
その人は黒いフードを深くかぶり黒い衣装につつまれ、死神のよう
だ。

表情は無表情だった。

紅月の光に天空城の十字架のような紋章がキラリと光つた。
謎の人は数分たつと、煙のように消えた。

序章（後書き）

暖かい日で見守ってください。

1章 動き出す者 Part 1（前書き）

- - - - - 田の前には霧に包まれた街があつた。

レイはそこでおバカな忍者と少年に出会う。

彼らの目的とは・・・

1章 動き出す者 Part1

一章 動き出す者

— マナ

レイとミルトは草原の中、歩いていた。

草原は綺麗な緑色をしていて、まるで緑のじゅうたんのようだった。さわやかな風がレイの銀色の髪をさすつて去っていく。

「うーん。どうしようか・・これから・・・。」

天空城 待合室にて

俺を呼び出してボスはなにをするつもりなのだろうか。

もちろん、ボスではなくボスの秘書がくるはずだ。

しばらくすると、ドアが開く音がして、秘書が入ってきた。

「失礼します。」

秘書は眼鏡をかけなおし、右腕にかかえたノートを手に取り、要件をいった。

「ボスのご命令です。龍が一匹見つかったようです。名はミルト。白き光の龍の子です。龍騎士の鎧をすれば、龍は味方と勘違いするはずです。ヴァッシュさんはよろしくお願ひします。現在、コーマロ草原にいるようです。しかし人間が一人くつついでいるようですね。」

「俺じゃなきゃいけないのか・・・。」

ヴァッシュはボソリとつぶやいた。

「どうかしましたか?」

「なっ・・なんでもないです。」

秘書はこれでも剣の使い手らしい。この前一人兵士が逆らって殺されたらしい。

身の凍る話だ。少しでも逆らえばあの世行きだ。できればこんな所から抜け出し、友と遊びたい。

「了解しました。今、向かいます。」

ヴァッシュはこの部屋からでて、向かいの部屋に入った。

太陽の光を一番浴びる大きな部屋だ。この部屋はがらんとしていて家具もなにもない。たつたひとつ大きな扉があるだけだ。扉はギギギと音をたてて、開いた。

冷たい風が部屋に入り込んできた。

もはや地面は見えず、どこもかしこも雲だらけである。

扉からヴァッシュは落ちた。

龍騎士の翼を広げ、飛び立つた。

ユーマロ草原

「ミルト・・・町に行つたら龍狩りがまた始まっちゃうよね・・・クリスタルタワーの人達なら、龍を大切にしてくれるんだけど・・・遠いなあ・・・。」

レイは目の前の町を眺めた。

「町で情報収集したいけど・・・んー残念・・・。」

ミルトが「それなら・・・」と言いかけたとき二人は人の気配を感じて、立ち止まった。

レイは急いで刺青をターバンで隠した。見られたら大変な事になる。上から感じる・・・。

親しい龍の匂いがするが、敵だ。

レイとミルトは上をじっと見上げた・・・何もない。

だがここでその主にスキをとられたら・・・死ぬかもしれない。
(レイには負けるがまあまあの殺氣だ。レイ、注意して。)

「わかった。」

ヴァッシュはかなり緊張していた。

「コイツを殺すのはいやだ・・・だから・・・人間を団に入れて龍は俺がなつかせよう。だが・・・そんな簡単にいくものだろうか・・・。」

レイはじつとしていた。

不意に上から声がした。

「天空城に入らないか？ そうしたら、命は助けてやるべ。」
その声の主は空の中、・・・カモフラージュされている。
目を細めてよく見ると・・・空がゆがんでいるようだ。
・・・人間の形に。

レイはフフ・・・・と笑った。

「いいのか！」

ヴァッシュは嬉しそうに言った。

そしてレイは笑顔でいった。

「無理ヤ・・・。」

レイはポケットから銃を取り出してゆがんだ空に、一発撃つた。
銃声がはじけるように鳴った。

人が鳥のように、落ちてきた。

起き上がるうとする前に、レイは剣を突きつけた。

「さあ！ 天空城の場所を吐きなさい。」

ヴァッシュはレイの足を蹴り、レイを転ばせた。
するとレイのターバンがほどけてしまった。

ヴァッシュは大きく目を見開いた。

「くそ・・・！ 刺青の印を見られてしまつた。ここつ・・・生きて返
さない。」

レイの目が銀色にギラリと光つた。

「お、お前は・・・・！」とヴァッシュ
「こ、こいつは・・・呪われた月族！！」

ヴァッシュはレイに剣を突きつけた。

ヴァッシュは息を切らしている。

そこにミルトが突進をかました。するとヤツは吹っ飛んだ。

地面にぶつかる時、鈍い音がした。

ヴァッシュは悲鳴をあげた。

「・・・・痛そう。」

そして、ヴァッシュはすばやく立ち上がった。
ヴァッシュは龍の翼を広げ、真っ青な髪をたなびかせ去つていった。
「命はないと思え。」ヴァッシュはそういう残して、空へと飛立つ
た。

「逃がしたか・・・・。ミルトー！」から逃げるよ。町
を通らなきやいけないけど・・・・」

とレイが言いかけた時、ミルトは首を振つた。
(もつといい案がある。)

ミルトの指す方向に、草原に生えてる草をのんびりと食べている
1匹の馬がいた。

「この馬・・・でかい！――」

毛並みはサラサラの真つ黒な馬だ。

鞍が取り付けてある・・・誰かの馬なのだ。

「かわいそうだけど、乗らせてもらひうよ。」

レイは周りを見渡して、馬に飛び乗つた。

飛び乗ると馬にスイッチが入つたように、馬が暴れだした。

「ミルト！バックに入つて！」

ミルトはバックに入り込み、すっぽりとおさまつた。

レイは馬にしつかりつかまつた。

今じゃ動くこともできない。

馬は助けを求めるように鳴いた。
とにかく暴れまわつてゐる。

大きな鳴き声にきづいたのか、ナイフを持ったおじさんが「こいつに
猛烈な勢いで走つてくる。

・・・その走る様子はまるで魔物だ。

(おお！すごい殺氣を感じる！レイ以上ある！) ミルト
「のんきな事いわないで

「ドロボ

！――

「ひい！・・・ば、化け物おおお」とレイ

馬も恐怖したのか、すごい速さで逃げ始めた。

その馬の逃げる速さはとんでもなかつた。

どれだけ飼い主が嫌いなのかよくわかる。

「は、早すぎるううう」。

風が痛いくらい速い。とにかく速い。

少し経つとこの速さが快感になつてきた。

後ろを見ると「化け物」は遠く、蟻のように小さくなつていた。

逃げ切れたようだ。

「息ぴつたりだね！」とレイは馬の首を優しくなでた。

そして馬は嬉しそうに鼻を鳴らした。

天空城 戦闘指示室にて

「すみません。つかまえられませんでした。人間は・・・全滅しましたはずの月族でした。」ヴァッシュは床に頭をつけながら話した。
「役立たず・・・ですね。ボスをしっかりとお守りしてください！」
よっぽどボスのことを思つてているのだろうか、すごい怒りだ。

秘書は咳払いをしてまた、話し始めた。

「今度は失敗しないでください。十数人兵士をつけますので・

・・・・」今度は静かに言つた。

「ありがとうございます！了解しました！」

ヴァッシュは丁寧におじぎをして小走りで部屋から出て行つた。

天空城 頂上にて

「ボス」マナは頂上から地面を見下ろすのが好きだった。マナはまだ幼く十歳で、ボスの役目をするのはまだ早い。今はいいように利用されているのだ。

ここにいれば、だれも邪魔なんかしてこない。

今もこうしてのんびりと景色を眺めている。

すると、後ろの扉が不意に開いた。

「だつ、誰だ！」

「わたくしです。失礼します。」

秘書、ヘリムが扉から入ってきた。

「な、なんだ、おまえか・・・。てつきり敵が乗り込んできたのかと・・・」

マナが言い終わらないうちにリムが早々と話し始めた。

「月族の人間が

龍は 。」

マナはぼんやりとしていてリムの話なんて耳に入らなかつた。
私にとって意味の無い話だらう。これは単なる儀式にすぎないのだ。
風が優しく頬を撫でて行つた。

「・・・・月族か。それにしても、眠いなあ・・・・。」

マナは思わずあくびをしてしまつた。

「ボス！聞いているのですか？あなたの命に関わることです！
「す、すみません・・・・。」

「なんだよ、コイツ。いつも私のことばかり、しかる。怖い。」
遠くの山は色が薄く、近くなるにつれて色は濃く深くなる。

マナはそのまま山の景色を眺めていた。

「 私はこのまま人形でいるしかないのか。・・・それとも・・・。」

マナは遙か遠くの虚空を見つめて思つた。

二 遭遇

ユーマロ草原をこえ、ひとつ山をこえた。
そして、ここにやつてきた。

「何なの・・・この町・・・」

レイの目の前には霧がかかつた町があった。

しかし、人の気がしない、生きていらない町だった。

馬は乗つていてわかるほど震えていた。

レイは馬から降りて優しく首を撫でた。

すると、馬の振るえはだんだんと消えていった。

「大丈夫・・・? (ライトニング) ?」レイが馬を撫でながら言う。

(ビミョーだな・・・その名前。)

「いいのー・ライトニングなの!」とレイは言い切った。

(それよりもや、レイ・・・ここ、かなりヤバイと思う。)

「ええ。でも、ここを越えないと私は弱いまま。」

レイはそのまま、ゆっくりした足取りで霧の中へ入つていった。

一步先もあまり見えない。人の呻き声が聞こえるような気がするが、
氣のせいだろう。

そしてけつこう歩いた。不意に前から声がした。

「ここには来ないほうがいい。深く空気を吸うと氣が持つていかれ
るだ。」

マスクをかぶつたようなこもる顔が聞こえる。しかしこの顔はレイのようないい子の顔だ。

「だれ・・・・？」

もう少し声の近くに行つてみると、レイより幼い子がちよこんと立っていた。

金髪で耳の前は黒く染めてある。

無地のローブを着て、襟を口までのばして空氣を吸わないよつじしている。

金髪の男の子は『ゴーグルをはずしてもいい』といつた。

「もうすでに遅いか・・・・お前にには呪いがかかつてしまつた。

「 目の前がぼんやりしてきた・・・男の子が上下に揺れている。自分が揺れているのか・・・？

気が失われようとする前に、田の前に火花が散つた。レイはそのまま地面に倒れこんだ。

「むぐ・・・・。」頭が割れるよつ

に痛い。

後ろから殴られたようだ。
からうじて田は開くようだ。

〔ま・・・・まぶしい。〕

レイの視界の端にヒラヒラするものが田に入った。
わつかの男の子のローブだらうか。

「あつ！兄さん起きましたよーよかつたあ。」明るい声が聞こえる。
田の前がはつきりしてきた。

それとともに、ミルトとライティングのことも思い出した。レイは急に起き上がつた。

「ミ・・・・・ミルトはー？」

「はあ？ミルト？あの馬のことか？外で暴走している。亡靈に憑か

「 れたようだ・・・。もう呪いを解くしかない・・・」

忍装束を着て、特大手裏剣を背負つた黒髪の男が言った。レイより年上のようだ。額には、はしまきが巻かれている。

「ラツキー。・・・ミルトの存在に気づいてない
レイの枕元においてあるバックにそっと手をのせてみる。

ミルト・・・・・。

レイは心の中から呼んでみた。すると、すぐに返事が返ってきた。
(あ・・・。レイ、起きたのか。・・・・良かつた。それより、そ
の男の話を聞いたほうがいい。ライト・・・ニシング? ?が心配なら。

「すまんが、一緒に呪いを解いてくれるか？儀式が必要なんだ。」
「私の旅この馬は必要なんざ。手伝うよ。私はノイ。」

レインは手を差し出した

「俺はギバ。」と装束の男。

一人はレイの手を握った。

さりき殴ったのは俺だ。すまん。でも、亡靈に憑かれるより……

キバが最後の言葉を言う前に顔にレイの握り拳が飛んできた。

「これで、あいこだ。しかも、力加減考えろ。」とレイ。

「おお・・・怖い、怖い・・。へやはひ・ひやへ」

「この町は夕方が過ぎ、暗くなり始めたとき、霧が出てくる。その霧は町に入った人たちを閉じ込めるんだ。しかも、霧を吸うと何でも凶暴化する・・・狂うんだよ。」

だ。この町の東には都に続く洞窟がある。入り組んだ洞窟だから、はぐれないように。間違えて山頂に行くんじゃないぞ、あそこに行って帰ってきた奴は一人もいない！！そして、その洞窟を越えると水銀の泉に出る。ちなみに水銀の泉は水銀でできない。・・・たぶん。あとは行つてみれば分かる。」

話し終わるとティラが口をはさんだ。

「もう、夕方だから、明日を待とう。」

沈黙。空気が悪い。

すると、キバが口を開いた。

「お前・・・何か、隠しているだろ？。話してみろ・・・。」 キバとティラが真剣なまなざしでこちらを見てくる。

「へど、どうする・・・ミルト？」

（いいんじゃない？・・・けど条件付きでね。このことを誰にも言わないって条件。と・・・旅の道すれとなつてもらう条件。）

「わかった。・・・言ってみる。ミルトの事と私の事。」

レイは重い口を開いた。話そうとしたがかすれた声しかでない。レイは咳払いして話始めた。

「唐突に言おう。私は月族。しかも龍がいる。」

キバ達の答えは意外とあつけなかつた。

「いいよ。僕たちも闇に生きる者さ。ね、兄さん。」とティラ。キバは子供のようにコックリとうなずいた。

その様子からキバの方は少々ビビッたようだ。

「呪いを解くかわりに・・・道連れになつてくれないかな。仲間がいるんだ。」

そして、この答えも逆にあつけない。

「それは、無理だ。」とキバ。

「そう・・・残念。」

沈黙。空気がもつと悪い。霧の威力より強いかもしねない。

レイはバックからミルトを抱き上げた。
ぐっすりと寝ている。安心しているのか、とてもいい表情をしている。

「かわいいね・・・」とティイラがミルトに触れようとした。
そのとたんに、ミルトの目がぱちりと開き、唸り始めた。
「あ、あぶない！」

レイは急いでティイラの手を払った。

「「めん・・・。」とレイ。

ティイラは少しがつかりしたようだつた。

「月族にしか心を開かないんだよね。」

ミルトはまた、スウスウと寝息を立て始めた。

もつと空気悪くなつたー。

そのとき、キバが立ち上がつた。

「俺、飯作るわ。」

「よ、よかつたあ・・・・・。キバ、ナイス！」

飯といふ言葉に反応して、ミルトがぴょこんと起き上がつた。

目をきらきらと輝かせている。

「ねえ、レイさん。」ティイラがいきなり、話しかけてきた。

「何？」

「僕と兄さんは本当の兄弟じゃないんだ。僕はずつと、ずっと北の果ての工場で古稀使われていた。毎日、毎日意味のわからないものを造らせられた。兄さんは、僕を、そこのみんなを助けたんだ。・・・今は僕と兄さんでこいつ、活動をしているのさ。ぼくも強くなるために。」

「そつか〜。」

レイはぽつりと思った。

「私と一緒になのか。」

少し時間が経つと、部屋の中にはおいしそうな、香ばしい匂いが漂

つていた。

「みんな一飯だぞー。」

向こうの部屋から、キバが呼んでいる。

ミルトは一瞬にして、この部屋から消えた。

「お腹すいたー。」

テーブルには魔物のようにでかい、焼き魚が載っていた。テープルからはみ出ている。白い湯気が立ち上っていて、とてもおいしそうだった。

「いただきま す！」

4人は勢いよく食べ始めた。

レイは一口食べると、手を止めた。

口の中になんとも言えないまずさがゆっくりと、広がった。

「キバ、・・・これ・・・焼いた魔物！？・・・まずいー。」

キバは手を止めた。

「これが、野生の世界だ。この魔物は魚みたいだが、違う。俺は魚太郎」と呼んでいる。

「・・・な、なんとも名前があ 界つて・・・。」とレイは思つた。

(何言つていんの？レイ、お前のライティングといつゝ名付けセ ンス)と同じではないか。・・・しかし、野生の世界といつのはよくわからない。)とすかさずミルトが、心の中でつっこんだ。

結局、体がもたないのでレイは、魔物を渋々食べた。

そうしてこの明るい食事は終わり、明日に備えて寝ることになった。食事した部屋をミルト達、そのとなりの部屋をキバ達が使うことになつた。

なつた。

「おやすみ・・・ミルト。」

レイはそういうじごひきをたてて寝てしまった。

(早ー)

朝。

レイは目を開けた。牙、ティラ、ミルトが私を見下ろしている。

「むう。まぶしい・・・・。」とレイ

「起きる、もう行くぞ。」とキバ。

「わかつたよ・・・。」

レイはむっくりと起き上がるとバックを背負った。

ティラがびっくりした顔をした。

「レイさんは武装したまま、ねるのですか！？」

「うん・・・。何がおこつてもいいようにね。」と冷たい水で顔を洗いつつ言った。

「僕も今度から、そうする。」とティラがつぶやいた。

「いくぞ。」

キバが扉を開けるとにぎやかな町の光景が見えた。

野菜を売り出す人、おばさんの立ち話、げんきに遊ぶ子供達・・・。この人たちも、夕方になると亡靈に体を乗っ取られてしまうのか。そう思いながらもレイたちは町を出た。

町を出ると、目の前にはすぐ洞窟があつた。

この洞窟は山の入り口のようだった。

レイがそんなことをぼんやり考えていると、キバとティラがいなくなっていた。

「行こうか、ミルト。」

洞窟に入つてみると、いきなり別れ道だつた。

「ここはあえて、横穴に入ろうか。」

レイは身をかがめ、横穴に入つていつた。横穴はとってもじめじめしているが、クリスタルの光に照らされて、明るい。レイは横穴をでて、あたりをぐるりと見渡した。

「誰も、いない。」

すると後ろからカツカツといづ、足音が聞こえてきた。

「キバ・・・？ ティラ・・・？」

前に・・・あいつらがいる。

前のように、逃げるわけにはいけない。今回は龍の匂いはすべておとしたし、顔が解からないように、兜を装備した。
すこし人影がみえると、人間と龍に話しかけた。

「あのーすみません。道に迷ったのですが、ご一緒してもいいですか？」ビヴァンシュは言った。

レイはいそいで龍をバックにいた。

「あ、大丈夫です、隠さなくても。」

チツとレイは舌打ちすると、笑顔で振り向いた。

「いいですよ。」とレイ

「・・・わかりますよ。僕はこれでも龍騎士。だから、すぐになりますよ。」

ヴァンシュはかがんで手をたたき、「おいで。」と声をかけた。

ミルトはこの人が嫌だった。

嫌な感じ・・・。じりじりと近づいてくる、嫌な感じ・・・。

ミルトはレイの後ろに隠れ、眉間にしわを寄せて唸り始めた。

レイはよしよしと、ミルトをなだめた。

「本当は、なつくはず・・・なんだけど。」と、ヴァンシュは立ち上がつた。

これはヴァンシュの本音だつた。本当はミルトを手なずけて、わざと帰りたかった。しかし、無理らしい。

「じゃあ、行こうか。」レイはニツと笑って歩き出した。

ヴァンシュは立ち止まり、考えた。

このままじゃ、やばい・・・。

レイはその様子を見て、首をかしげた。

「どうしたの・・・?はやくキバ達と出口で会流すの」とになつて
いるから。もう一人はつっこむと思つよ。」

「キバって……。」

ヴァッシュはもつと考え込んでしまった。
ヴァッシュは内心とてもびっくりしていた。

思い出した！

あの日のことを……。

僕とキバは幼馴染で、一番仲がいい親友だった。
でも、僕はもう、縁を切ったんだ。

ヴァッシュは白黒の画面で思い出をみているようだった。

ヴァッシュとキバは一人で木を積み上げて作った、秘密基地でよく遊んでいた。

9歳ぐらいのときだった。

キバは12だつけ。……。

「気が狂つたか！天空城に入隊する？お前はそんな奴じやなかつたはずだ。」とキバ

ヴァッシュは暗い顔をして、じっと地面をにらみつけていた。目には涙がたまっていた。ヴァッシュは無理やり入れられたことを言わなかつた。もし、言つていたらキバは命にかえてまで自分を助けに来るからだ。だから何もいえなかつた。ヴァッシュの目から大粒の涙がこぼれた。ヴァッシュは何も言わずに駆け出した。

もうキバとは、親友として会えない。

敵として、会うのだ。

「バカヤロ

」キバの声が遠くから聞こえた。それでも僕は、

走り続けた。

「なんだつたなあー。キバ、元気かな。どんな人になつているかな。

「おーい。いくよ?」レイの掛け声でヴァッシュは我に返った。

「うん。行く。」とヴァッシュは駆け出した。敵として会つとしても早く会いたいと思つた。

そのころ、キバ達はクリスタルの光もない真っ暗な横穴を進んでいた。

「これが一番近道だ・・・。レイ達を洞窟の出口で待つていよう。」
洞窟の中がだんだん明るくなつていた。

「兄さんもう、出口ですね。」

「ああ。」

その頃レイ達は出口ではなく、山頂に進んでいた。

ミルトはレイに話しかけた。

(この横穴・・・風が吹いている。・・・行ってみる?)

レイは横穴に入つてみた。顔に強い風があたる。

「本当だ・・・行つてみよう。」とレイ。

ヴァッシュは、どんどん突き進んでいく一人と一匹に振り回されていた。

だから、バテ氣味である。

身をかがめて横穴に入ると、すぐに光が見えてきた。

「まぶしい・・・。」

あまりのまぶしさに、二人と一匹は目を細めた。

その頃キバ達は、出口で待つていた。

「遅い・・・遅すぎる!」とキバは右往左往していらっしゃっていた。

「兄さん、何があつたのかもしれません。もしかしたら、山頂に進んでしまつてゐるのでは？」とティラが言つた。

「めんどうだが・・・行くぞ。」

レイ達は山頂にたどり着いてしまつた。

レイ達が立つてゐる場所は一言で言い表すと、『光の神殿』に続く階段だつた。

真つ白な階段と黄金に輝く神殿は空中に浮いてゐる。幻想的な景色だつた。

「すごい。ミルト、綺麗だね。先に進んでみる？」とレイ

「・・・うん。」

レイは何百段もある階段を上り始めた。

『そういえば、さつきからミルトの調子が変・・・』とレイは思つた。

何十分か経つと神殿の扉の前まで來ていた。

近くで見ると、豆粒ほどだつた扉はレイの背丈の三倍ほどあつた。

レイとミルトが開けようとしても、びくともしない。

その時、影の薄いヴァッシュュが「ここは僕に任せください。」と言つた。

ヴァッシュュは少し下がると、扉に突進した。すると、扉のド真ん中に人が通れるほどの穴があいた。

「意外ともろい素材で出来てゐるみたい。」とレイは扉の破片を触りながら言つた。

神殿の中はとても神秘的だつた。

神殿のステンドグラスがきらきらと輝き、神殿は黄金の光に満ちていた。

神殿の両端の柱はレイの背丈の五倍ほどある。その柱のてっぺんに彫刻の龍が一匹ずつ乗つっていた。

レイは目を細めて、一匹の彫刻の龍をじいと見た。

頭にはミルトと同じ、太陽の形に似た光の紋章が描かれていた。

「もしかしてミルト、ここは君を祭る神殿なのかもしないよ？」

とレイ。

「かもしない・・・。というより、そうだと思つ。この光の紋章は、光の龍の証拠、誇りだから。」とミルト。

レイはまた、じいと彫刻の龍を見つめた。

レイは彫刻の龍を指で指した。

「あの彫刻、今にも動き出しそうだね。」とレイが言つたとたんに、彫刻の龍の目がレイの方にギロリと向いた。

「ひい。」とレイは言つと、剣を構えた。

ミルトはいつもと違い、無表情だった。ミルトの琥珀色の目が黄金に輝き始めた。

「剣をおろして、そこで待つていて。」と言つとミルトはゆっくりとした足取りで両端の柱を通つた。彫刻の龍の目がミルトに注がれる。

ミルトが呪文をブツブツ唱え始めると神殿の黄金の光がより、濃くなつていった。

ヴァッシュとレイはその様子を静かに見守つた。

少し時間が経つと神殿の天窓から小さな物体がゆづくじと落ちてきた。よく見ると、鍵のような形をしている。

その鍵が大理石で出来た床に音もなく落ちた。

そのとたんに、彫刻の龍、2匹がしゃべりはじめた。

「小さき光の龍よ、その鍵を取り、我等を倒さん。」

ミルトは鍵の鎖をくわえて、自分の首にかけた。

「・・・やりますよ。」とミルト。

「私もやる！」とレイは鞘から剣を抜いた。

ヴァッシュは空氣的に戦わなければいけないので、背中に背負つた

トライデント（三叉の槍）を手に取つた。

「やるしかないのか……。」とヴァッシュ

彫刻の龍の足元にビビがはいつた。

足元の爪をよく見ると紅く染まっていた。

もしかしたら彫刻の龍によつて、命を落とした人達がたくさんいるのかもしない。

「うーん。ぞくぞくしてきた。」とレイは言い、呪文を唱え始めた。それを守るように、ヴァッシュが前に出る。ミルトは床を蹴つて、空中に飛び上がつた。

（この鍵・・・みるみる力が湧いてくる・・・）とミルト。

彫刻の龍は重い翼を持ち上げ、羽ばたき、大理石の床にドーンと落ちてきた。

そのとたん、レイは一匹の彫刻の龍に指を指し「hell light」（地獄の光）と唱え、指から真っ赤な光を放つた。

彫刻の龍の首にヒビがはいつた。

ミルトは口からそのヒビの割れ目に光の弾を放つた。光の弾は割れ目にすっぽりと入り込んだ。首の割れ目から一筋の光、二筋、三筋・・・とどんどん増えていき、光の弾は爆発した。

石の破片が四方八方に吹つ飛んだ。

ミルトはそれをひらりと避けた。

「よし。一匹倒した。」とレイがガツツポーズをした。

もう一匹がすばやく前に躍り出ると、重い尾をレイの腹にたたきつけた。

レイはそのまま吹き飛び、壁に激突した。レイがあまりの痛さに唸ると、口の端から血が垂れた。目の前がちかちかして、動こうとする

（レイ、動かないで。）とミルトが後ろを向いていった。

レイはコックリとうなずくと、うつろな目で呪文を唱えた。

「darkness meteori te!!!」（闇の隕石）」と

レイは空を指差し唱え終わった。

空から轟音がし、どんどん近づいてくる。

「ちゅー・ヤバイー出ぬかー」 ヴァッシュはレイを抱いで外へ出した。

ミルトもそれに続いて外に出た。

空を見ると闇色に染まった隕石が三つずつと落ちてくる。

ヴァッシュは階段を急いで駆け下りる。

少し経つと、後ろから耳の鼓膜が破れそうな音が聞こえた。

ヴァッシュが階段の下りる速さをゆるめて、神殿の方を向いてみた。

神殿は跡形も無く崩れ去っていた。

じつと立ち止まって見ていると、空中に浮いている階段がぽろぽろと落ち始めた。

「ヤバイ」とヴァッシュはつぶやき、我に返つて転がるように駆け下りた。

階段はヴァッシュ達を追つように落ちていく。

最後の五段くらいの時、田の前に忍者の格好をした男とロープを着た男の子が出てきた。

ヴァッシュは、はつとした。

キバだ。

ヴァッシュは踏み外し、気持ちのいいほど綺麗に転んでしまった。そしてそのままゴロゴロと大玉のように転がっていく形になった。

キバは田を見開いた。

とつても大きな、人と龍と石の破片がじんじんに向かって落ちてくる。

「に・・・兄さん！」 テイラがキバに手を伸ばす。

「んぎゃあー」とキバは変な裏返った奇声をあげて人の塊につぶされた。

「・・・・・・・」

キバはうつ伏せに倒れ、その上にテイラが乗つかり、その上に田を

回したヴァッシュが倒れ、一番上にすっかり回復したレイがへ 足を組んで ヾ 座っている。

その上に空を、嬉しそうにミルトが空を飛び回っている。

「ああ～。極楽！いい景色だね。ミルト！」とレイ

ミルトは嬉しそうにうなずいた。

キバの「んぎやあ」という奇声がへ やまびこ となつて響いた。

「んぎやあ・・・んぎやあ・・・んぎやあ・・・」

そのやまびこはレイとミルトの爆笑にかき消された。

この後、キバが笑い者にされるのは ・ ・ ・ 言うまでも無い。

四 親友

ヴァッシュはキバを目の前に、衝動的に体が動いていた。

前にいるのは親友のキバだ。

キバは僕のこと、まったく知らない人だと思っている。

兜をとつたら、月族の奴に正体がばれるなんてわかつっていた。

そして十数人の兵士のこともすっかりと忘れていた。

「キバさん・・・。いや・・・キバ。僕のこと覚えているか。

ヴァッシュは兜を脱いだ。キバは目を大きく見開いた。そして、レ

イ達は印象的な真つ青な髪を見て、驚いた。

「お・・・お前は・・・。」とキバ

「お、お前 ! 」とレイ

「誰スカ・・・？」とティラ

唯一、ティラだけが状況を把握できていない。

その時、洞窟の中から五人の兵士が現れた。

「月族の、おとなしくするんだな。」と剣を抜いた兵士が近づいてきた。

「ちっ。はめられた。」とレイは舌打ちした。

レイはミルトに心の中で話しかけた。

「三人乗せて、空を飛べる？」

（無理に決まっているが、・・・やつてみよう。）とミルト

放心状態のキバ、状況を把握できていないティラを無理やり乗せて、わざわざレイも乗った。

ヴァッショは遠い田で「俺」とのことを見ていた。

俺のこと、どう思っているんだろう。きっと僕のことが憎いのだろう。また一緒に遊びたいけど。ヒューッ。

キバは遠い田で「僕」とのことを見ていた。

僕のこと、どう思っているんだろう。きっと僕のことが憎いのかな。また一緒に遊びたいけど。ヒューッ。

レイがミルトに乗ると、逆たり前のよう、下へ下へと落ちていった。

「ギャ

。」とレイとティラが叫んだ。

下を見ながらミルトは風船のようないのを口から出した。

（これで、助かる・・・はず。）とミルト

「はずってなんなんだ

。」とレイ

風船のよつなものが地面をはじいて、ミルト達を優しく持ち上げると、風船はシャボン玉のように破裂してしまった。

「やばい、このままだと骨折する。」

そのとき、運がいいことにライティングが駆けてきた。

三人はきれいにライティングにまたがった。

ライトニングはかなり大型の馬だから、落馬することもない。

「ありがとう。」とレイはライトニングの首を撫でてやった。

昼だから呪いも解けているのだろう。

ライトニングはうれしそうに鼻を鳴らした。

「でも、これだと水銀の泉には近づけない・・・。もう兵士に抑えられているのでしょ。」とレイはキバを見て言つた。

「・・・ティラ、俺は決めた。」とキバ。

「何を、ですか。」とティラ。

「俺らもここの旅に同行することになりそうだ。」とキバはヴァッショのことを思つて言つた。

あいつ、・・・ヴァッショのといひまで たどり着いてみせる。と
キバは拳を握り締めた。

五 化ける町

遠回りして来た町はとても洋風でかなりおしゃれな町だった。床は赤いレンガを敷き詰められてできている。

家が立ち並ぶ商店街はとてもにぎやかで、ビルにも赤白の旗がたつている。

赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白赤白

目が回りそうだ。

クロワッサンを焼くバターのいい香り、スconeの香ばしい香り、紅茶の香り、どれも全部おなかを刺激する香りだつた。だからミルトが入っているバックは、もぞもぞ動いて落ち着きがない。どれにしてもレイ達には買ひうことができない。

お金が・・・ないから・・・だった。

レイのお腹がググググ・・・と静かに鳴つた。

レイはおなかを押さえて言つた。

「ねえ、キバこのままじゃ私達持たない・・・。」とレイ

「うん、そうみたいだ。ティラに宿の予約は頼んどいた。ライトニングもそこにつないでおいた。」とキバ。キバが指さす方に、手を振つて『いる』ティラがいた。おなかのすいている様子は見れず、元気そうだ。

「子供はいいなあ。」とレイ。

「いや、あんたも子供だろ。」とキバはつっこんだ。
が、キバもおなかがすいているらしくシッコミの力がない。

「キバがこの町にいると変だね。」

「なぜだ。」

「服が和服だし、・・・変だから。」

「誉めているのか？」と、キバは左手に握りこぶしをついた。レイは横に、ふんぶんと首を振った。レイは純粹に質問に答えただけだった。

「誉めてないよ。」

「俺は、これでいい。」と、最後にキバは開き直った。

レイは突然、足を止めた。

「キバ、賭けてみようか。」とレイ

レイが見るほうには、怪しく光るとにかく怪しい店があつた。看板には（賭ける店）という適当な名前がつけてある。

そして無駄にピカピカと光っている。

レイはポケットに手を突っ込んで、コインを取り出した。

コインはキラリと光り、レイはにやりと笑う。

「子供はいけない。」とキバ。

「今はもう、毎日いけないこと、してるじゃないか。」

たしかにレイの言つ通り、龍を持ち歩いている。

「・・・・・」キバは何も言えなくなってしまった。ティラだつたら言い返せたかもしれないが、キバは少々、頭が悪い。要するにキバは筋肉バカと言われても、文句が言えない。

少々反抗してみたが、レイに足蹴りをくらわせられ、結局、怪しい店に行く事になった。

さつそく入ると、金髪で笑つた田のキバくらいのお兄さんが、レイに話しかけてきた。

「こ・ん・に・ち・は〜。お嬢さん、君の腕を見込んでの、お・い・し〜話があるんだけど・・・。」

「どんな話？」気持ち悪い奴と思いつつ、レイは言った。

「いいだろう。聞いてやる。」とキバ

「ちょっと外へ。」と怪しいお兄さんが言った。

分厚い扉が開くと眩しい光が入つてくる。レイはまぶしさで目を細めた。

「で、話なんだけど。俺、警察なんだなあ。ちなみに俺の名はレアン。」

レアンがポケットから警察の紋章を取り出した。

（ヤバイ感じ?）とレイはひつそりと思った。

「話はね、この町だと、とつても有名な『怪盗カノン』ちゃんについてなんだ。ミッションクリアすると、一生暮らしていくれる金がもらえる。『役者』として、協力してくれないかい。」

レアンは顔の前で両手を合わせて「お願ひだ」と言った。

「面白そう・・・ねえキバ、お金もらえるらしくして、やってみようよ。」とレイ

「ああ。いいかもしれん。」とキバ

レアンは「よし」と言つてポケットからくちやくちやの紙を出した。

「じゃあ証明として、お名前を書いてもらいます。」とレアン

レイとキバは顔を見合させ、決心したようにうなずいた。

レイは左手に羽ペンを持つと「ソウ・Hマナ」と書いた。

反対から読むと、名前ウソである。レイは「我ながらいいネーミングだ」と心中でつぶやいた。

（おお。レイにしては考えたな。でもすぐ、ばれそうだぞ・・・。）

とミルト

キバは右手に筆と墨汁を持つと、力強く、かつよく、「魚太郎」と書いた。

（・・・・・レイ・・・・。）とミルト

レイはキバにテレパシーを送りたかった。実際には龍にしか送れないが・・・。

「魚太郎はないでしょー。どれだけ魚太郎好きなのー?でも、墨汁じや取り返しつかないし・・・。」

レイの心の叫びは虚空へと、消え去った。

ミルトもそれに同感したようだ。キバの「名づけセンス」はレイよりレベルが低いようだ。

ところで、筆と墨汁はいつ仕入れたのだろうか。・・・気になる。そして、その仕入れ値も・・・気になる。

気づかれたのだろうか、レアンは一人の名前を見て、ふっと座じい微笑みを浮かべた。

「ありがと。君たちは俺に今日の深夜までついてきてくれればいい。あ、まあ指示もするけどね。それだけで、儲かるんだから。よしじく。」とレアンはまた怪しく微笑んだ。

「聞きたいんだが、なぜあの店にいた？」とキバ

「ああ。フフ・・・それはねえ・・・。」とレアン

「それは？」とキバとレイが声を合わせていった。

「金の亡者があつまるからさ。」

そしてレアンは一矢りと笑った。

「このミッションのこと誰にも言つなよ。言つたら、お前等、殺されれるぞ。」

レアンは口に指をあてて、ansomと喋つた。空気に冷たい殺氣のものが横切つた。

「！！」

「もしかしたら・・・コイツ、できるー！・・・だけじ、警察だし、

仲間になんてできない。」とレイは思った。

「魚太郎くん・・・これ、結構やばいかも。」とレイ。レイは魚太郎という名前を少々馬鹿にしつつ、言った。

「だ、だ、どう、どう、おあが、な。」とキバ。キバは少しビビつているようだ。

(せんとう)にからかいがいのあるやつだ。だからレイの標的にされるのだ。) ヒミルトは心の中でつぶやいた。

「魚太郎くん、噛みすぎだよ。ビビッてる? まあ、私ひとつでは面白いけどやー」 とレイははしゃいだ。

「・・・ビ、ビビってなんか。・・・ヴ・・・・わうお、俺も、そ、そつ言いたい所だ。」 とキバ

(なにか面白くて大変そつなことが起きる予感・・・フフ。) ヒミルトはつぶやいた。

龍のくせこのんきである。

六 楽しいカジノ

ミッションが始まる前に、やはり賭け事をして何か食べようとレイは企んだ。

「じゃあ、やってみますか！」

レイはスロットをすることにした。

このスロットはめずらしく、縦も斜めもなく、一列の横だけだ。

三つ同じ絵が出たら、コインが出てくる。

レイは椅子に座ると、コインをひとつ入れた。キバはやり方を覚えようとして必死に見ている。

スロットがグルグルと回り始めた。

レイはレバーをガシヤリと音を立てて、引いた。

一つ田の絵、やべりんぼ。

二つ田の絵、やべりんぼ。

三つ田の絵、やべりんぼ。

キバは「やつたー」と叫んだ。

まわりの人には迷惑だ。

コイン取り出し口からチャリンと音を立てて、一枚のコインがでてきた。

キバはぴたりと叫ぶのを止めた。

「…………。」

・・・・果てしなく、しょぼー。

レイは無言でキバに一枚の（希望の）コインを渡した。
キバは無言でこいつくりとうなづくと、隣のスロットへ座った。
キバはレバーを音も立てず、元に、ゆっくりと引いた。

一つ目の絵、みかん。

一つ目の絵、宝箱。

・・・この時点ですでに終わってこる。

三つ目の絵、さくらんぼ。

キバは目を輝かせて言った。

「あ、おしいつ！」
なにがおしいのか、まったくわからない。
こうしてひとつめ（希望の）コインは失われたのだ。
しかしそだ、レイのひとつめのコインがある。

（レイ、私にまかせて。）とミルトが不意に話しかけてきた。
「・・・わかつた。」

ミルトはバックの穴から前足を出し、勢いよくレバーを引いた。
そして最後に手から光をだした。
完全なる魔法である。イカサマしかも、龍だけの魔法。

一つ目の絵、最高得点の宝石の絵。

「一つ皿の絵、宝石の絵！」

「一つ皿の絵、宝・石・の・絵！」

今度はレイがうれしさに小声で「やった。」と言った。
コイン取り出し口からジャラジャラと出てくるのかと思つたら、ド
サツと音を立てて、十枚のコインが出てきた。

「・・・・・」

イカサマしたのに、イカサマで返されたような気分だ。
ミルトもさすがに立腹のようだ。
グルルルと唸つている。
最高得点が十枚だけ。

何回かやって、五十枚に増やした。
ちりも積もれば、山となる。である。

レイはそれをお金にするとポケットいっぱいになつた。
歩くたびに金がジャリジャリと音を立てる。
「まじ」とこ良き音なり。」とキバはつぶやいた。
外に出ると、まだ空は明るい青色だった。
まだ暖かい昼なのだ。

まだまだ時間はたっぷりある。

宿で待機していたティラと合流すると、レイたちは商店街へと足を運んだ。

からつぽのお腹がやつと満たせるのだ。

これは、朝食なのだ。とレイは自分に言い聞かせた。

商店街せうひんがい、元気やかだった。

いろいろと物色して、結局お金は使い果たしてしまった。

キバが肉をおいしそうに咀嚼している。

「もぐ・・・。だれだ！金を使い果たした奴！」

「いやー…まだれもなくお前のせいだよー」

とティラとレイは同時に叫んだ。

キバは肉をたくさん食べて最後の金を使い果たしてしまった。
レイとティラはクロワッサンとスープで我慢したのである。

キバは肉で膨れたおなかをでんつとたたくと、「食った。食ったー。

」とつぶやいた。

非常に困る奴だ。
このままギャーペー騒いでいたら、もう、空っぽんのりと赤く染ま
っていた。

七 楽しいミッシュショーン？

辺りは夕闇に包まれ、ミッシュショーンの時間が刻一刻と近づいてくる。

今、レイ達はティラと合流し、路地裏で作戦の話を聞いていた。

4人（正確にはもつ一匹）がこじつ狭い路地裏でくつ付いていと窮屈である。

「場所は美術館だ。なぜかと言つと、怪盗カノン」が予告したからだ。深夜2時にある有名な「微笑」いう絵画を盗む！つてな。だ・か・ら！」レアンが気持ち悪いしゃべり方をしたら、不意に無表情でティラがレアンの頬を殴った。

少しの間があいた。

レアンは少し驚いた様子だつた。

そして二人と一匹も驚いた。・・・といても。

ティラらしくない行動である。

「兄さんから聞いていたけど、僕はこの人ダメです。ほんと。」とティラは手をはたいた。

「そ・う・だ・け・ど、話は聞かなきゃダメだなあ。」とレアンはヒリヒリ痛む頬を撫でながらニッコリと言つた。

ティラの目が、「「イツ、本当にむかつく！」と語つていた。

レアンは一ヶコリ笑うのをやめると真剣な目つきに変わった。会つてからずつと笑つた目だったので、目の色がわからなかつたけど、今、血のような赤色だと気づいた。

「真剣な話に戻るぞ。お前らは入り口で2時になつたら言え。「あつ・怪盗カノンだ！」と美術館の向かい側の空を指して言え。邪魔な「観客」がそつちに行くからな、」俺達にどつて都合がいい。そうしたら美術館の裏にはじ」を置いておくから、それに上つて、屋上で待つていふ。」

一瞬、レイの真剣な目つきにレアンは戸惑つたように見えた。
「じゃあな。」とレアンはいつものからかつたような声で去つて言った。

そしてレアンの姿は人ごみの中にスッと消えた。

深夜2時前・・・美術館は警察に囲まれ、とってもまぶしいスポーツ

トライトがぐるぐるとまわっている。

スポーツライトが真っ白な美術館にあたると美術館がより、白くなるように見えた。

レイにはその光景が、まもなくショーグ始まるような感じに見えた。ミルトはその光景をバックの穴からのぞいていた。

とても楽しそうな表情を、レイはしていた。

（私も人間の姿に化けられればいいのに。・・・いや、いつか化けて楽しく一緒に旅をするぞ。）

レイたちは、路地裏から出ると一斉に叫んだ。お腹の底から声をありつたけ、だした。

「怪盗力ノンだあああああ！」

三人とも指す場所は少々違つたが（少々どころかまったく。）、この／＼ショーの観客／＼たちはここからきれいさっぱりと、いなくなつた。

そして警察の人たちも美術館からわらわらと出て行く。

レイはその光景を不思議そうに眺めた。

＼これもレアンの作戦の内・・・？＼

「まあいい。屋上に行こうではないか。」とキバが言い、誰もいなくなつた広場から美術館の裏に回つた。

角を曲がろうとしたとたんにレイの視界に黒い影が映つた。

「何！？」といつたとたんに後ろを見ると、ティラとキバがあとかたも無く消えていた。

レイはフツとあやしい笑みをうかべて、背中から剣を抜いた。

＼久しぶりだな・・・。この感じ。ちょっとうれしいかも。＼

とレイ。

（がんばれ。）とミルト。

もう深夜なのであたりは真っ暗である。

スポーツライトが唯一の光だ。

目の前に黒い影が二つ落ちてきた。

＼一人なのか。＼

レイは正体不明の影に切りかかった！

そのひとつ目の影はさりと避けると「あらーあなたの友達って結構おバカさんなのね。」と言った。

一人は女のようだ。

レイは挑発に乗つてしまい、もう一つの影に切りかかった。
その影は「ほらよつと。」といい軽々と避けてしまう。

もう一人は男のようだ。

「ちつ。こいつら、速い。このときにキバとティラがいれば対抗できるのに……。」

レイは女の影の方に剣を突くそぶりを見せ、くるりと右回転をして一つの影に、みね打ちを食らわせた。

運よく一つの影は同時に仰向けになつて倒れた。
レイはさらに一人につかみ掛かった。

「お前らは誰だ！」と、怖い風に一喝。

そのとき、スポットライトが二人に当たつた。

「やあ。」と見知らぬ女が一言。こいつは怪盗カノンなのかな？

「！」こんにちは～。ソウ・ヒマナくん。・・・あ。レイくん」と
男。というより……

「ぎゃあ。レ、レアン！？何で！？」

二人とも怪盗らしい裏生地が真っ赤の黒マントを身にまとっている。

そのとき不意に空から何かが降ってきた！

「んぎゃ～」といつ呼び声をあげながら、猛烈ないきおいで落ちてくる！

レイは避けきれず、その下敷きになつた。

「ぐあ！」

レイの上に乗つかつたものは、キバとティラであった。

二人とも頭を回していく無防備である。

レイは一人の下から這い出ると、キバの頭を無表情で殴つた。

「ぐはつ！」

キバが顔を歪めて頭をさすつた。

レイはレアンたちの方を振り返つて満面の笑みを浮かべた。

「もうこの美術館には用はない・・・早くしないと警察が戻つてくる。悪いが三人には少々寝てもらひつけ。」とレアンは声を低くして言つた。

レイの顔が驚きに変わる前にレアンは瞬時に動いた。

「じめんよ。三人とも。」レアンは三人の腹を殴つた。レイの目の前に火花が散つた。

三人ともぐはつと言い、前のめりに倒れた。

レアンはキバとレイを肩に抱えて、カノンはティラを持ち上げた。

「行くぞ。」

二人は影になり、ランプの暖か味のある光に燈された、建物や人々を股に、夜景を駆けた。

レイの鞄の穴からミルトは夜景を眺めた。

その景色はとても美しく、建物から漏れる光は星のようで、ミルトはそれを見ていて星空を走つているような感覚にとらわれた。

レイとキバ達も目をうつすらと開けて、ぼんやりとレアンの肩から眺めていた。

レイはカノンとレアンの足元を見てみた。

黒いブーツが艶やかに光る。地面に足はついていなく、足は空を切つていて。

「空を飛んでいる・・・！」

その景色の中、町を出て、草原に出た。夜風が髪をなびかせる。空を見ると空いつぱいに大きな白い月が顔を出していた。

草原はざわざわと音をたてて、まるでレイたちを歓迎しているようだ。

さらに草原をでて、山の一角についた。暖かい光が漏れる、木で造った山小屋が一つ、深い森の中にはつんと建つていて。

レアンとカノンは地に降り立つとレイたちをそつと地面に置いた。「はあ～重かつたあ～。」とカノンは伸びをして、山小屋に入つて

いつた。

扉からオレンジ色の暖かい光が漏れていた。

レイは立ち上がり、服に付いた土や埃をはらつたあとキバとティラを無理やり立たせた。

レイは何も言わずに扉を乱暴にあけると言つた。

「ミッショントリニティのお金はいらない。だから、仲間にならぬか？」

レアンは鼻で笑い、言つた。

「警察なんだぜ？竜を持ち歩いているお前らなんかと仲間にはならないな。一応敵だからな。」ポケットの中に手を入れてお金を探して、「チヤリ」と言わせてくる。

〔竜を持ち歩いていることが、ばれている…〕

明るい所で一人の顔を見ると、まつたく同じような顔をしていた。二人とも金色に輝く金髪で目は血の色。双子なのだろうか。その血の色の目を輝かせて、カノンは猛烈な勢いでレイの手を取つた。カノンの手はなぜか汗でびっしょりとぬれていた。

「私が行く！前からやりたいことがあって……。お宝とか……お宝とか……」

カノンはレアンの方を振り向いて「いいよね」と言ひたげな顔をした。

しばしの沈黙が流れやがてその表情を見てレアンは笑つた。

「……だめだな。こいつらはそんなことを目的にして旅しているわけではないんだ。」とにやりと笑い、ポケットから銃を取り出して、「これで怪盗！」つこも終わりか。」と独り言をつぶやいた。カノンはとても残念そうな顔をして、ぶすっと頬を膨らませそっぽをむいてしまつた。

「もう行こうよレイ。もうすぐ明日が来るよ。」とティラがレイの

青いターバンを引っ張つた。

「天空城に送り出されるなんて、まっぴらごめんだね。」とキバが言い、外へ出て行つた。

「そうだね。・・・あつ待つて。レアン。」

レイは言いレアンの顔の前に手を差し出した。

「なんだ？握手か？」とレアン

「ぜんぜん違う。」とレイは首を振つた。

「ほら、ミッション分のお金。」とレイは手でお金の形をつくつて、言つた。

「現金な野郎だ。」とレアンは言い、さつきからポケットで転がしていたお金をレイの手に渡した。

レイは自分の手の中できらきらと輝く金貨を見て、うれしそうに笑みと笑つた。

外に出るとあたりは霧に包まれようとしていた。

体に当たる霧はとても冷たく、風邪をひいてしまった。レイは結構前を歩いているキバとティラに小走りで追いついた。レイの横をミルトが霧を楽しみながらちょこちょこと歩いている。レイは不意に後ろを振り向いてみた。

山小屋があるはずのところに山小屋はなかつた。霧に包まれて見えなくなってしまったのだろうか。

それとも、もともとないものだったのか。

レイは狐に化かされたかのように虚空を見つめていた。

二人には、また会いそうな気がする。
レイとミルトはそう思いました。

八 会談

レイ達は町にもどり、宿に泊まることになった。

玄関まで行くと、ライトニングがうれしそうに鳴いた。
宿の中は木の香りとポタージュスープの香りがいっしょになつてい
い香りだ。

「おなかすいたあ～」とレイはいすに座つた。

「そうですね。」とティラがうなずいた。

「で、俺らはどこを目的にしているんだ。天空城もどこにあるのか
わからないのに。」とキバは唐突に言つた。

「そうですね。」とティラ。

「うん。クリスタルタワーに行こうと思つていい。」

「クリスタルタワーとは、平和を象徴して造られた建物である。そ
の建物のすべてが水晶でつくられていて、水晶は雲を突き抜けてい
る。美しい建物だが、裏には何かが隠されているという、うわさも
流れる怪しい塔だ。クリスタルタワーの団体（宗教）を動かす人間
は「姫」と呼ばれ、姿は見せるが、だれにも顔を見せないと言う。

しかし天空城の味方ではない・・・。といふことは、いまからでも私たちが架空の宗教をつくりて、味方にしちゃえれば遅くないってこと。味方にできなくても、天空城の場所は知っているはず、人質にして無理やり聞き出すつていうのもありだし・・・。まあ、どっちが楽かな・・・私たちにとつて。」

レイの説明中に一人は運ばれたスープをペロリとたいらげていた。「うーん、僕、暴力的なのはきらいだけ、架空の宗教をつくるのは難しいかな・・・。そんなに僕たち頭よくないし・・・。」とティラ。

実際に頭が良い順だと、龍神、ミルト、大賢者、賢者、レイとティラ、ライトニング、大魔物、その他魑魅魍魎、・・・・・・・・・キバ。という感じである。ミルトは最強に頭がいいのだ。

「俺は頭がいいから、どっちでもよいぞ。」とキバ

しばしの間があいた。

レイとティラはキバをにらみつけた。
キバは石化したくらいにかたまつた。

（フン、おもしろい状況ではないか。）とミルトは鼻で笑った。
ミルトはこの状況を（蛇ににらまれた蛙）に似せて、（レイににらまれたキバ）と呼ぶことにした。

「じゃあ暴力的に行こう。」とレイはうれしそうに言った。
(楽しくなりそうだ。)とミルト。
ミルトもやつと大暴れできる日がくるのだ。
うれしくないはずがない。

一章 蠢く者

一 天空の表に立つ者

「うーん。」

昼まで寝ていたようだ。

体が重くて、だるい。

わたしはベッドにもぐりこんで一度寝を試みた。
やはり、だるくて眠れない。

「しようがない、おきてみるか。」

わたしの大きな部屋にさびしく独り言が響いた。

わたしはベッドから静かに降りるとミシミシと不快な音が聞こえた。
歩くと頭がガンガンと痛い。

カーテンを開けると昼の日差しが差し込んできた。
わたしはまぶしくて、目を細めた。

天気は今日も快晴、いい天気だ。

不意に扉の外から声が聞こえた。

私はすばやくベッドにもぐると、耳を澄ました。

「十歳の少女にはボスはまだ勤まらないのでは。」

男の声だ。

少女とは失礼な。

あの方でしょ、あの方！

と心の中で独り言を言った。

「いえ、あの方なら勤まります。絶対に。私は長年あの方といで、一番あの方を知っているので。長年といつても十年ですが。あと、お言葉にお氣をつけて。失言は命取りになりますよ。」

わたしの親友、女秘書とも言える、リムである。

リムは十七歳である。

リムは私が生まれた頃から一緒にいた人間だ。

剣術から魔法、勉強、すべて二人でならい、ここまで来た。だからなにもかも私と同レベル……と、言いたいところだが、精神年齢だけは私が劣っているのだ。

・・・・あたりまえか。

リムをいいなって思う事は多々ある。

目の色と髪の毛はきれいな真紅・・・。

わたしはそんなきれいな色じゃなくて、焦げ茶である。だが、目は自慢できる金色なのだ。

この金色の目は風華一族で代々受け継がれてきたものだ。

「フツ・・・おまえはまだ知らないのか。マナはただの操り人形にすぎない。本当に天空に立つものはの方なのだ。天空城の表に立つ者がマナなのであれば、裏に立つ者はの方だ。」
最後には男は狂い笑いをし始めた。

わたしは必死で耳をふさいだ。

「やめて！！」

必死に耳を塞いで叫んでもいつこうに笑いは治まらない。耳に水が流れるように男の笑いがはいつてくる。

耳が痛い。

「フ・・・失言・・・ですね。死んで自分が馬鹿だったと反省しながらい。」

力チヤ。

リムの剣を鞘から出す音が聞こえた。

「知らない・・・。」と何回も繰り返しつぶやいた。

無音になつた。切る音は聞こえなかつた。
扉のしたから真つ赤なものが流れてきた。
それは白い床を鮮やかに赤く染めた。

みるみる赤く染まつていく。

きつと、この赤い液体は獣になるとわたしは思つた。
そしてそのままわたしに噉み付いてくるんだ。

わたしは田を逸らした。

これまで戦闘訓練であれをいやというほど見た。

しかしリムが訓練以外で、斬るところを私ははじめて見てしまった。

「はつ！・・・夢か。」

マナは真つ白の大きなベッドから飛び起きた。
手には汗でぬれていてべとべとしている。

きている服がピタピタと張り付いて気持ち悪い。

（夢でよかつた。）

でも心底実際にあつたことだと思つた。

カーテンを開いて外を見ると、まだ田は出でていなかつた。

星がでているが、真つ暗である。

紅い月がきらりと光つた。

暗い空の中、紅い月がわたしの田がおかしいのか、月に弧を描くようになつて、裂け目が出来てわたしを「ふふふ。愚かな人間だ。」と笑つた

よう見えた。

(紅い月・・・やだな。不吉だもん。)

マナは壁にかかっている時計を見た。

短い針はちょうど3を指している。

「まだ深夜の3時だ・・・。リム・・・今、仕事中かな。」

マナはよく深夜におきてしまうと、リムのところへ遊びに行くのだった。

リムが鉛筆で書類になにやらを書いている音が心地よく、いつの間にか寝てしまう。

だがあの夢を見てから、この部屋からあまり出て行きたくないなつた。

この部屋をでていったらあの男に会ってしまうような気がして。

このドアを開けば、男が待っている・・・。

マナは頭を振つてその考えを振り落つた。

いたとしても、斬るだけだ。

(今夜は紅い月・・・。リムを探さないと何か起ころうかもしれない。)

マナは扉を少し開けて外を見回した。

外は少し肌寒くて、マナは部屋に戻った。

寝る前に脱いだ白いジャケットを腕を通すにはあつた。

この白いジャケットはボスの証。

羽毛できでいて、とても暖かい。

そしてまた外に出た。

うん、大丈夫。

寒くない。

外を見ると、兵士が3人ほど廊下を回つているところだった。

理由もなく部屋から出ると兵士にとつつかまつて終わりだが、マナはごまかすのが得意だった。

マナは小走りで兵士に近寄った。

鎧は月の光でてらてらと光って、いかにも高級そうな龍騎士の鎧だつた。

背中には三叉の槍を背負つている。

今日の兵士は若い新米で影が薄い。まあ私にとっては印象深いのだが。

「ヴァッショ」という名の男だ。

最近、リムに叱られたらしげ・・・。（リム、怖いだろうね。）

近づくと新米くんはかなり驚いた。目をしっかりと開いている。

兵士が「なぜこんなところにいるのですか？」と聞く前にマナはいわけを言った。

「今日、私は正夢をみた。・・・たぶん。今宵は紅用だ。不吉な予感がするのだ。これは本当。警護を厳重にシラミツブしに回るのだ。わかつたな。」

「あっ、はっ、はい！」

兵士と新米くんは焦つてビシッと敬礼すると、クルリと方向転換した。

（よし、私の行く方向と正反対だ！）

そしてマナはリムの部屋へと走り始めた。

マナは後ろを見ながら走つているとドンッと硬い何かにぶつかつた。

「イタツ！」

マナはしりもちをついて、顔をゆがめてお尻をさすつた。前を見ると死神のような衣装を着た人が立っていた。ゲームという名の男だ。

年齢は十七くらいだらうか。

全身黒くてフードは目の人まで隠れている。なんか気に入らない、表情のわからない男だった。

「すみません。マナ様。大丈夫ですか？」

かける言葉はやさしいが、声は冷たくまつたぐ、感情はこもっていない。

男が手を差し出してきた。

「大丈夫。ありがとう。」

の言葉とは正反対に私は差し出された手を振り払った。さつきの夢をおもいだしてしまい、少し声が震えた。

マナは、昔から「トイツが怪しい」と思っていた。

いわゆる夢の「天空の裏に立つ者」だと思つ。

だからリムに行動をすべて記録してもらつた。

そうしないと私だけが知つているの完璧な「計画」がバラバラになりそうな気がして。

マナは急いで立ち、ゆっくりとした足取りで男の横を過ぎた。

男はマナの方へ振り向かずに冷たい声を放つた。

「マナ様、どこへ行かれるのです？」

その声はさつきの声より冷たいものだった。

その冷たい声はマナをつらぬいた。

「ちょっとトイレに行こうと思つて。」

「・・・あなたにしてはぐだらない嘘ですね。・・・今日は出歩かないほうがいいと思いますよ。今夜は紅月ですから。・・・では。」
と男は歩き出した。

すこしの間、私は動けなかつた。

あの男に私の計画がばれているように思えた。心を見透かされているように思えた。

マナはリムのことを思い出して、はつとした。

(リム、大丈夫かな。)

マナはリムの部屋へと一直線に走つた。

心の中で「大丈夫かな。」とリムのことを心配しているが、心底、自分の不安を消すためなのだった。

リムは絶対に大丈夫だ。

でもマナの不安はどんどん広がるのだった。

あの夢の中の血のよう。

廊下にはマナの小さな足音だけが響いていた。
細い廊下はその音をよく響かせた。

ここを兵士に見つかったら部屋に引き戻されると間違いないしだ。

マナは少し冷静になつていきなり走るのを止めた。

走りすぎて息がみだれ、ハアハア言い始めた。

それをぐつと我慢すると、廊下は無音になつた。

マナは冷静に歩き始めたが、不安はどんどん広がつていつた。
不安がピークに達したとき、マナはリムの部屋の前に来た。
この迷宮のような城の中から一つの部屋を探したのだ。
マナがドアを開けると暖かい空気が漏れてきた。

その暖かい空気はマナを包み込んだ。

不安がじわじわと消えていくのがわかつた。

「あっ、マナ？」というリムの声が聞こえた。

リムの声が聞こえると心の中の紅い不安がすっかりと無くなつた。

リムは人がいないと私を呼び捨てにした。

少しひるの声を聞いてうれしくなつた。

リムは私の顔を見ると、少し驚いた顔をして、ほほえんだ。

「今日も来ちゃつた。」

とマナは恥ずかしそうにほほえんだ。

リムは眼鏡をクイッと上げると仕事に戻つた。

リムの部屋は私の部屋と構造は同じだが、すこし小さめでできていた。

しかも、リムの部屋は私物が置いてなく、殺風景だ。

床には私用の毛布と敷布団が敷いてある。

そのとなりには白いリムのベッドが置いてあつた。

私はそのままリムの暖かい部屋の中で鉛筆の音を聞きながら、毛布の中にもぐりこみ、眠つてしまつた。

（明日は会議のあとにゲームをつけてみよつ。）

二 もうひとつ組織

マナは会議に出ていた。

白く、長いテーブルにたくさんの人人が並んで座っている。

一人ずつ、前には紅茶がおいてあり、会議室は甘くていい香りに包まれていた。

マナはもちろんお誕生日席に座り、足を組んでいる。

その左側には秘書のリム、右側にはギームが姿勢正しく座っている。

マナは口を開いた。

「私には計画がある。諸君にはまだ話せない、失敗する確率が多いからな。まあ実際には永遠に話すつもりはないが・・・。残念ながら、諸君には何を言われても変更する気はない。」

「マナさま！マナさまの身近な人には教えるのですか！」と一人の兵士が席をたつた。

新米くんだ。

勢いつけてたつたので、カップから紅茶が少々こぼれてしまった。
マナは微笑みを浮かべた。

まったく気の抜ける質問だ。

私が嘘をついているとでも思っているのだろうか。

それとも会議の空気にがんばって入れてもらおうとしているのか。

「大丈夫だ。安心しろ。秘書にも話しておらん。話そうとも思った
がやめた。」

質問に答えるとき、新米くんは自分でこぼした紅茶を一生懸命に自分
の袖で拭いていた。答えは彼の耳には入らなかつただろう。なぜ
なら、リムがとっても冷たい目で新米くんを見ているのだかい。

「マナ様はその計画をお一人で実行するのですか？」ともう一人の
中年兵士が言った。

するどいな。

「当たり前です。わたしはこの計画を実行したばかりなので。あと
みんなにばれたら、反対されること間違いなしだから。ブーブー言
われるのはもう、いやなんだ。私はボスなんだから、ボスらしく行
動する権利がある……もう質問コーナーは終わりでいいかな。
じゃあ、君たちの今後の仕事を今から相談しようか。」

マナはそういうとおりしそうにズズズと音をたてて、紅茶を啜つた。
紅茶の甘い香りが口の中にふわふわと広がった。

会議が終わると会議室から兵士たちがぞろぞろと出で
きた。

そのまま机の影に隠れていると、ギームが会議室から出てきた。
ギームの影のようにマナは歩いた。

リムのくれた銀色月長石を持っていると、人間の視界に入らないら
しい。

この石は月族だけに本領發揮するそうだ。まだまだ未知なる能力が眠っているということだ。

ということは、人間からみれば、マナは透明人間だ。だが、動物や魔物には気づかれる。そしてしゃべったりするとすぐに気づかれる。

よつするに息を殺して行動しなければならないのだ。

ゲームは迷宮のような廊下を迷わず歩いた。

まるで目的地に吸い付けられるように。

歩くのが速くて見失いそうだったが、マナは足を速めて歩いた。（速いな・・・・どこに行くんだる。何も無いといいけど。）

ゲームは角を曲がった。

マナも急いで曲がる。

ゲームは立ち止まり、誰かと話していた。

マナはとっさに耳を澄ました。

「あっちの組織はどう動いている？」とゲーム。

「あらら、ゲームくんつけられてるみたいだね。」

もう一人の男はゲームを呼び捨てにするほど、権力があるのだろうか。

「ばれている。やばい。でも最後まで聞かなきゃ。

「・・・・いい。聞かせる。」

「わかつたよ。」と男はあきれたような声をだした。

「

男はゲームの耳元でなにかをささやいた。

「・・・・・・・・・そうか。」

「・・・・聞こえない。聞こえないよ。

「　天空城　」、「クリスタルタワー　」、「闇の扉　」、

「　達　」　　がいつかぶつかることはよく覚えていたほ

うがいよ。僕は世界的大戦になると思うよ。じゃ。

「

男は一瞬にしてブーウンという機械音のような音と共に消えた。.

一部聞こえなかつたけど……人かな。

それにして、闇の扉とはなんの組織なのだ？
とにかく、私の計画で大戦を阻止しなければ。

そんなことを考へて、ギームの事を思い出した。
ギームは冷静な目でこちらを見ている。
しかし私を直視していない。

「…………誰だ。」

「…………」

マナは足音をたてず、ゆっくりと歩き始めた。
するとギームは指をマナに向けた。

「…………fire storm」

指先から火の玉が次々とマナに向かってくる…

「…………！」

マナはひょいひょいと避けたが、最後の一つに頬があたってしまった。

熱い！という悲鳴を飲み込んで、足音も気にせず、マナは駆けた。
人ごみに隠れれば平気なはず。

ギームは追いかけてきたが、それほど速くはなかつた。
どんどん遠ざかつた。

ギームは追いかけるのをあきらめたようだ。

マナはひどじみの真ん中に来ると、銀色月長石を左ポケットから取り出した。

月長石は銀色にきらきらと輝いている。

マナは月長石のひんやりとした表面を撫でた。

これで私は見えるようになるはず。

いきなりマナが現れたので、周りの人が少々驚いていたが、マナが口に指をあてて「しいい」「」と言つと黙り込んでくれた。

そしてマナはひとりきりになると、廊下をのんびりと歩き始めた。

(リムにも報告しなくちゃ……。)

と思いつつ、窓の外を見た。

灰色の厚い雲が空を覆っている。
歩きながら外の景色を見ていると、水滴がぽつぽつと窓に当たり、かわいい音をだした。

そのうちその音はどんどん激しさを増して、ザーザーと降り始めた。暗くなつて窓にはマナの顔が映つた。

窓の中の、マナの目から水滴が流れ落ちた。
自分が泣いているように見えた。

リムに会うと、マナは人が居ない部屋に入り、さつきの話を始めた。

リムが話しが聞き終わると「そつか。」と言で終わった。

リムは少し間をあけると口を開いた。

「マナは本当に私に話さなくて平氣なの?」

重そうな口調だった。

「なんのこと?」とじらばくれても無駄だった。

「・・・平氣。」の計画を君に話したら、反対するだらうし、妨害もしていくだらう。」

これでリムは黙り込んで、話が終わった。

(闇の扉について、少々探らなければならぬようだな。
マナはニヤリと笑つた。)

(私には策がある。金で動いてくれる、とつておきの情報通がいる。

けつじつ手強い奴が・・・。)

その人はいろいろな組織に平等に接していて、全部の情報を持っている、せこい人である。そしてつかみどころがない。今後の力ギとなるであろう男だ。

マナは自分の部屋に戻ると、通信機を手に取った。

これだけが連絡を取れる。その人にもらったものである。

「もしもし?」

少しの間が空いてから返事が聞こえた。

「あっ。はいはい。マナお嬢さんですね。今、レイさん達と絵を盗もうとしてるんですけど・・・まあいいや。はい、なんでしょうか~。」

機械音に乗つて、気が抜けようつた声が聞こえた。

この男の名前をレアンといつ。

いろいろなことに手をつけている奴だ。

たとえば警察、怪盗、天空城の兵士などなど。まだ、たくさんある。レアンにはけつこう前からお世話になつている。

「闇の扉・・・という組織を知つてゐるか。」

少しの間があいてから返事が来た。

「ええ。もちろん知つていますよ~」

知りたい。

「話してくれないか。」

「それは、ちょっと。こんなところで話したら・・・。僕の仕事、成り立ちませんし・・・。」

「じゃあ、私がそちらへ移動するわ。」

リムにこの事を伝えればなんとか、聞いてくれるはずだ。

私が重い病気にかかったことに対するよいのだ。

そして臨時ボスは・・・・・リムとしよう。

リムなら了解してくれるはずだ。

・・・・後に考え方。

「あっ、そうしましょう。では、二二の大陸ではない方がいいですね・・・どうします?マナさん。」

「風華大陸でよからう。」

マナはちゅうとウキウキしたよつすで言った。

「マナさんが行きたいだけ、なんじやないですか。でも、よろしいですよ。華ノ国で会いましょう。三日後といふことでいいですよね。」

「ああ。じゃあな。」

マナは通信機をズボンのポケットに入れた。
よし、あとはリムにお願いするだけだ。

リムに話すと、反抗された。

「はい!?私はまく事ができる自信があるけど、いへりなんでも、危険よ!」

リムは私の中の、反抗期のようだ。

「お願い。」

トリムをただ見つめる。

「私行きます。」とリム

「いや、そんなことしたら落しまれるであろう。」

「マナが行つても同じよ！」

「いや、リムは私と違う事をやらかしかねない。たとえば、計画の内容を聞くとか。」

「・・・・・」

リムは黙り込んだ。

「図星だらう・・・・。」

「つもうー！」

トリムはこぶしを壁にたたきつけた。

この部屋にぽつかりと穴が開いた。

すごい馬鹿力だ。

外で歩いている奴は数人ビビッている。

人間は本当の事を言われると、怒るのである。

「・・・・わかりました。なんとかします。」

トリムは冷静さを取り戻した。

「月族の人間と同じ方向を歩くことになるけど・・・それでもいい？」とリム

マナは少し驚くと、謎のほほえみを浮かべた。

「大丈夫。彼女は私の姿なんて見た事ないんだから。」

とちょっとウキウキしているようだった。

「天空城をよろしく。」

「わかっていますとも。」とリムは力強くうなずいた。

2章 畫く者 Part 1（後書き）

前回のことなんですが・・・、魚太郎の読み方はうおたろうでもさ
よたろうでも、自分の好きなような呼び方で読んでください

三 水の神殿

二つの大船が海にプカプカと浮いていた。

一つは知らない人のもので、

もうひとつは・・・

「海を渡るなんて、聞いてないぞ〜！！！」

キバは広大な海の中で叫んだ。

広大な心を持った、海は叫びを受け止めてくれた。

もう一日も船の上で生活している。

船は港町で盗んできた物だ。

いかだでもなく、ヨットでもない、最大規模の大船である。

誰もいない大船に乗り込んで、勝手に出航させたのはまぎれもなく、レイであった。

これでもう、悪名高い三人組（ミルト以外）はあつという間に賞金首として広まった。

ライトニング（あくまでも馬）はどう船に乗らせようとしても、反抗してきたので宿に置かせてもらうことにした。迷惑だが仕方ない。「三日もかかるなんて、最初は驚いたけど、向こう側の大陸に行くには当たり前の所要時間かな。」とティラ

ティラはゴーグルを白い布切れでクイクイいわせながら、磨いていた。

キバはすつきりとするのか、さつきからずつと、叫んでいる。

ミルトは叫び声を気にせず、潮風に吹かれて人間に化ける修行をしている。

実は、ミルトはレイのバックに入りきらないほど、一日間で急成長した。

こんなにも早く育つとは、何かが近づいていく証拠だ。

ミルトは一足で立つと、もうティラの背を追い越しそうなのである。

だから人間になつて町を歩こうといつたのだ。

さつきから人間になつてゐる・・・なれでいるが、尻尾が出た人間や、体全体白い毛に覆われている人間など。人間の年齢はさまざまで少女、中年の女、おばあさんなど、今は女が気に入つてゐる様子だ。

おもしろおかしい物体と化しているので、この場合キメラと呼んだ方が正しいだろう。

その反面、レイはいらいらしていた。

目の前に風華大陸が見えるといつて、風向きが変わってしまったために、一向に近づかない。

この船の船長が座つていたと思われる、木製の大きな椅子に、足を組んで座つている。しかもその足は貧乏振りで落ち着きがない。

「キバ、もうすぐ着くと思うから静かにしてくれる?」

とレイが冷たい声で言うと、キバはやつと黙り込んだ。

「兄さん。作戦成功するといいですね。」

「うむ。俺は必ず、成功すると思つてゐるぞ。」

「キバ! 船の運転変わつてよ。」とレイ

レイはもう一日間ずっと運転している。

まあ、休憩するときは変わつてもらつたが。

「わかった。」

とキバは言つと運転席についた。

レイは明るく「やつたあ」と言つとミルトの方へ近づき、修行を手伝い始めた。

「ごきげんななめが一転したようだ。」

「意識するでは、ない。感じるのじゃ。」と適当な事をミルトに言つた。

「集中して、感じればいいのね・・・。わかった。」とキメラ（実際はミルト）が答えた。ティラは「そんな、適当な・・・」と思つていたりして、いたのだが・・・。

「そうじや。そうじや。」とレイが言つた。

するとキメラ（実際はミルト）がレイをにらみつけた。

「師匠、静かにしてもらえないでしょつか。集中したいのです。」

「つむ。」

ミルトは床に円を三重に描くと、ぼそつと何かをつぶやいた。
爆発音と同時にあたりに煙が広がった。

煙がだんだん薄れていくと、人影が見えた。

ミルトは完璧な人間と化したのだ！

しつぽも出でていなし、鱗もついていない。

しかも、レイの背の高さ、肌は白く・・・すらりとしていて・・・
白いワンピースを着ている・・・髪の毛も長く、白っぽい金髪で・・・

・
簡単に言つと、美女だ。

「これがミルトの趣味なのか・・・」

とティラは聞こえないうちに、つぶやいた。

「よくやつた、ミルトよー！」

レイはミルトを見上げて、うれしそうに言つた。

「ありがとうござりますー師匠ー！」

ティラは見ていて思つた。

「なんか一人の世界観が変わったような気がするけど・・・。気のせいかな。」

するとレイがいきなりティラの前に来て、静かに言つた。

「氣のせいではありますね！」と。

「あれ・・・？レイさんって、龍の心しかわからないんじゃないですか？」

「集中すれば、何でもできちゃうの〜。」

といつものレイさんに戻つたが、ティラはレイさんのことなどが少々怖くなつた。

「いや・・・。ないだろ・・・。う、うん。なにつてことだ。」

「今も考えたでしょ。」とレイ

「あの、本当に聞こえるのですか？」とティラ。

「ううん、聞こえない。」

あざりした答えを聞いて、ティラはぽかんと口を開いた。
レイはその顔を見て、ミルトと一緒に「がつはつは」と豪快に笑つた。

そんな面白いことが続いた中、人間の匂いをかぎつけたのか、魔物が静かにこちらへと近づいていた。

魔物は海からレイたちに襲い掛かるつもりだ。

大きな影が船の下を横切る

その気配を感じたのか、ミルトは一瞬で煙をもつもつと上げて、龍に戻り、耳をぴくぴくさせた。

（レイ、なんか来た。）とミルト

「そうみたいだね。」とレイ

そしてキバとティラも、一人の空氣を感じたのか、戦闘態勢にはいつた。

これだと、隣の船も巻き込んでしまうだらう。

隣の船も気づいたのだろう、船の動きが止まった。

巻き込まれることを承知しているようだ。

「・・・といふことは、隣の船は大物であろう……。」とレイ
（レイ！そんなこと、今かんがえないので、ちやんと集中して！そんなこと、後で聞けばいいでしょ…）とレイをミルトが叱る。

ザッパーん！

と、音がして、魔物だ！とレイは思ったが、違つた。

一つの船はぐるぐると回転している。

渦潮に巻き込まれたのだ。

一つの船は海に沈んだ。

そのまま、ゆっくりと落ちていく。

レイもそのまま深い青にゆっくりと沈んでいく。

このようなときに限つて、体は鉛のように重く、動かなかつた。
レイの意識はもうなくなりそうだった。

空気の変わりに、水が入り込んでくる。

しかし、咳き込んだら終わりだ。

・・・息が詰まる。

まわりを見ても、人は見当たらなかつた。

「苦しい・・・死ぬ・・・」

目の前がぼんやりとしてきた。

「まだ、だめなのに・・・」

視界の端に小さな人影が見えた。

こちらにどんどん近づいてくる。

体がふつと軽くなるのを感じると、安心してしまい、レイは氣を失つた。

「おーい。レイくん～？だめだ。氣を完全に失つている。」

氣の抜けた、聞き覚えのある声が響いた。

目を開けようとしたが、まぶたが重くてあけられない。

「大丈夫か？ 君、溺れていだぞ。」

こちらは聞き覚えのない女の子の声だ。

「レイ！レイ！」

この女の声もどこかで聞いたような声だ。

「くう、意識が遠のいていく・・・」

目が覚めた。

レイは寝転んだまま、あたりを見渡してみた。

何か、遺跡の中のようだ。

遺跡の柱は海のような深い青色をしていて、壁全体が柱に

埋め尽くされている。

「とにかく、この神聖な感じは、見た目もさうだが、光の
神殿に似ている。

水の音がチャップチャップと聞こえる・・・
水の音はレイの恐怖をそそつた。

「あっ。おきたみたいだな。おーいレアン君。
と、女の子が私の顔をのぞいた。

目が合うと金色の目を輝かせて、女の子はほほえんだ。
レイはほほえみかえして、立ち上がった。

「服が早くも乾ききっている。それとも、長いこと気を失っていた
のかな・・・。」

「こ・ん・に・ち・は〜。また会ってしまったね。レイくん。」と男
「お久しぶりです！」と女は手をあげて、指をひらひらさせた。

「あ
レアン！カノン！ なんで！？」
前もこのような感じだったような気がする。
これが「デジヤヴ」というものか。

ふむ、覚えておこう。

不意に、女の子が前に進み出て言った。

「申し遅れました、私は マナ と、いう者です。君とは同じ年だ
から、仲良くしてね。」

反応に困つたが、とりあえず自己紹介をして、「よろしく」と言つ
ておいた。

しかし、なぜ私の年齢がわかるのだろうか。不思議だ・・・。

「で、キバとティラとミルトは一緒になのね？」とレイ。

「うん、忍者の人と、ひらひらの人と、龍は一緒にこの遺跡に入っ
ていたよ。」と、マナ

「大丈夫、ティラくんたちなら、元気いっぱいに探索していくと思うのよ。」とカノン
「てか、さつきから魔物の叫び声聞こえない？ 水龍のおたけびみたいな。」

カノンがはずむように言った。

「うん、聞こえるね。」とレイは平然と言った。

「これは、水龍が威嚇している声だよ。けつこう近くにいるみたい」とマナは平然と言った。

グオオオアア！！

いいタイミングで水龍の叫びが聞こえた。

こちらの人たちなら、殺氣がありあまるほどあるので大丈夫だが、このときキバとティラなら震え上がつていただろう。逃げ回る一人を抑える役は、ミルトにまわるだらう。ミルトの苦痛にしかならないはずだ。

あの二人を抑えるのは 実に大変である。

いつもはレイがやつているのだが。

さあ、二人と一匹（特に一匹）は大丈夫であろうか。
そして・・・我ながら一人を抑えるリーダーシップはすごいと思う。

・・・・自画自賛だ。

「じゃあ、僕達も行きましょうか。」とレアンが言った。
「そうしましょう。」とマナはレイにほほえみかけた。

その頃、キバたちは・・・？

グオオオアア！！

「うひやあ。い、今、叫び声聞こえなかつた?」トライラはとびあがつた。

「うむ・・・あれはたぶん、名も無き水龍だな。呪縛されたものみたいだ。」

ミルト。

今は男の氣分なのだろうか、ミルトは美青年になつていて。やはり服は白一色である。咳払いをコホンすると、「やはつ、口ミコニケーションはいいな。」とつぶやいた。

ミルトの咳払いの理由は、ティラとミルトのまわりをやあやあきやあいながら、キバが走つているからだ。

ただの能無し。

それがキバのとつても、と一つでも大きな欠点である。「床が水浸しだね・・・と、いつことは水龍がとつても近くにいるつてことかな・・・」

しばらく歩くと、風が吹きつけてくる通路を見つけた。キバは走り回るのを止めて、ぴたつと立ち止まつた。

「・・・声が聞こえる。」

前をよく見ると、扉が三つも並んでいた。

左側は真紅の色、真ん中は真っ白、右側は深緑だ。キバは真ん中の扉のドアノブを手に取ろうとした。

「・・・やめろ。」

ミルトはすばやくキバの手首を握つた。

「なぜだ!」

「なんで?!

とキバとティラが同時に言つた。

「麗だ。」

真紅の扉のほうからゴチャゴチャとした雜音が聞こえた。

ミルトはゆっくりと真紅の扉に近づいた。

ミルトは真紅の扉の前に立ち、ドアノブに手をつけた。

ギ、ギギギ・・・・ガッシュアン

向こうの扉から鉄やりが天井から落ちるような音と悲鳴が聞こえた。

しばらく緊迫した状態が続いた。

しばらく時間が経つとミルトは口を開けた。

「開けてみるよ。」

キバとティラは、遠いところからうなづいた。

信用してないようだ。

まあ、いい。

ミルトは フウ と息を吐くとドアノブをねじり、扉を開けた。

ミルトの勝ち誇ったような顔が見えるとともに、何かがいろいろと落ちてきた。

ミルトの顔は瞬時に驚きに変わった。

ミルトの上にいろいろと降り積もった。

その景色は実に面白い。

俺はププっと吹いた。

けつこう前にもあつたあれだ。

あれは俺が下敷きになつたが、今度はミルトの番のようだ。

ミルトは煙を上げて、龍の姿に戻つた。

いかにも悔しそうな顔をしている。

上に積もつたいろいろなものとは、

えーっと、上に乗つているのが

レアン、レイ、カノン・・・・誰だろ？

見覚えのない女の子がクスクスと、笑つていて。

レアンとカノンが俺とティラに気づくと、「やあ」と手を上げた。

レイもうれしそうに笑つていて。

みんな無事でなによりだ。

しかし、なぜレアンとカノンがここに居るのか。

あの女の子は誰なのか、キバは強がって聞きださなかつた。

バカだな。聞きてばいいのに。

一件落着、ということにして少し休憩することになった。

ついでに、扉のどちらに入るかも決めることになった。

真紅の扉はレイたちが出てきたので、もといた所に戻ってしまう。

問題は真っ白な扉と深緑の扉だ。

と、マナは考える。

だが、それ以上の問題は光の龍、ミルトだ。

ここでつかまえれば、月族のレイは用なしだ。

レアンはマナが鋭い目つきで何かを考えている様子を楽しげに見守つた。

やはり龍のことを考えている・・・。

ここでつかまえれば、俺との相談も意味がなくなる・・・かもな。

マナはレイに近づいた。

「ねえ、レイ。」

「なあに？」

「君は何を目的に旅をしているの？」

レイは悲しそうに、ふっと笑った。

「天空城だよ。」

「そうか・・・。うん、それだけ。ごめんね、辛いこと聞いたらつて。」

レイは無理に笑顔を作ると、首を横にふった。

マナはレイに背中を向けて、考えた。

いまにも笑いがこみあげてきそうだったが、それを押し殺した。

自分が「出迎えに来てくれるやつだ。
それはいい。

もつと、利用してやることな・・・。

龍に手をつけるのは、もつと後のことでななりそつだ。

「あつ、そうだ。わたし、盗賊やつっていたから、ドアの扉、得意だ
よー。」とカノンがいきなり立ち上がった。

「やう！じゃあ、お手並み拝見。」とレイ。

カノンはまず、深緑の扉のドアノブをじっくりと眺めた。

曲線の部分をゆっくりと撫でる。

手をあごにあてて、考えている様子だ。

そして今度は、扉を撫でた。

ざらざらとした、石の手触りだ。

今度は口ノン口ノンと、扉をたたき始めた。

曇った音が多い。中に何かがあるようだ。

カノンは扉に口をあてて、「わあ！..」といきなり叫んだ。

耳を当てるど、カノンの声が部屋の中で、響いているのがわかつた。

「ふーん。

今度は真紅の扉に手をつけた。

「そこは僕たちが出てきた所だけぞ・・・。」とティラ。

「真紅の扉は罠あり、だけど、そこまで危険じゃなかつたわね。私達の地面がなくなつて、私達は落ちてきた・・・。ただ、それだけだつた。」

カノンはティラの質問に答えなかつた。

なにやら独り言で物事を整理しているようだ。

真紅の扉を撫でた。

ざらざらした触り心地がある。

今度は真っ白な扉を撫でた。

艶々している・・・。

綺麗に磨かれた、石のようだ。

扉をたたくと、「ンンン」とい音が部屋に響いた。

「これ、素人でもわかるわ。真紅の扉と深緑の扉は人工的に、新しく造られたものね。白い扉が本物よ！」

カノンは「まつたく、てきとーね。」と、得意げのようだ。
レイたちは白い扉を開けると、先へ進んだ。。。

四 水の妖精

ウォーター・フェアリー

部屋はドーム型になつていて、声がやけに響いた。

とても、じめじめしている。

壁や地面には水のような、水じゃないような、液体が張り付いていた。

みずあめのような、どろどろとした感触だ。

触ると少しヒリヒリした感触が残つた。

ドームの真ん中には透明の丸い、お皿がひとつ置いてあつた。

お皿の中にも水あめのような物体がぬらぬらとうごめいていた。

お皿はあやしく艶々と光つている。

お皿の上には、光の神殿にもあつたような、鍵がぽつんと立つてい

た。

ミルトは体が衝動的に動いていた。
鍵がミルトを呼び寄せるのだ。

みんなはその様子を見守っていた。

魔物やら、なんやら出でるのは承知しているのである。

ミルトの指（前足）が、鍵に触れた

お皿に入っていた、水あめのような液体がミルトの前足にまきついた。

「ギャウ！」

ミルトはあまりの痛さに吠えた。

レイがミルトのしつぽを持ち、引っ張った。

すばんと高い音を上げて、ミルトは水あめから抜け出した。

レイは勢いあまり、しりもちをついた。

ミルトは前足を見た。

ミルトの手（前足）の中に鍵はなかつた。

鍵は水あめのような液体の中に残ってしまったのだ。

お皿の液体が人間のような形をつくつていいく・・・・。

やがて液体は少女の形をつくつた。

鍵は少女の心臓のように、バクバクと鼓動を刻んでいる。

「小さき光の龍よ、我の源を絶つてみせよ」

少女は地面に手を押し付けた。

押し付けた手の所から魔法陣がみると部屋を包み込んでいく。

魔法陣が天井まで達すると、魔法陣の線は青白く光った。

青白く光つたと思うとその線から水が湧き出でてきた。

水はどんどん増え、レイはひざまで水に浸かった。

その水は真ん中みると集まり、水龍を作った。

水龍は一声吠えた。

グオオオアア！

「ワオ。これがあの叫びの正体よ。」とカノン。

カノンは片手にマンゴーシュ（短剣）を一本持つ、もう片方の手にブームランを一本持つた。

「そうだね。」とレアンが弾むように答えた。

レアンは右と左のポケットからマシンガンを取り出した。レイは一人の武器を見て、目を輝かした。

そして「すごい、かつこい・・。」とつぶやいた。

「あ・・・・・。私、武器わすれちゃった。」とマナ。

「じゃあ、私たちを魔法で援護して。」とレイ。

「わかった。」とマナは後ろへ下がった。

「僕たちもやる。兄さん。」とティラは無地のローブから左手を出し、左手に銃を取り付けた。

「うむ。」

キバは少女に特大手裏剣を投げつけた。

手裏剣は少女の腹に貫通した・・・が、貫通した後、通り過ぎて手裏剣は壁に激突してカラッと音を立てて、落ちた。

「なに！」とキバは落ちた手裏剣を手に取った。

「こっちよー。」

カノンは一步前にステップを踏み出ると、マンゴーシュを華麗に空中へと投げ、ブームランを一本、力強く投げる。空中のマンゴーシュをきれいにキャッチして、そのまま少女に突進した。ブームランも同様にマンゴーシュは少女に貫通した。

そして少女は原型をなくし、木つ端微塵となつた。水は少女のいた場所に戻り、少女は再生した。

「な、なんと・・・。」とカノン。

「これじゃあ僕の技も効きそうにないね。」とレアンはマシンガンをしまい、マナに言った。

「ねえ、マナ。君の攻撃魔法、石化をしてじらんよ。」

レイはまた目を輝かせた。「えー・石化！すごい～。」

「わかつた。でも時間かかるから、援護して。」マナは地面に石で何か描き始めた。

少女は水龍の背中をたたいた。

水龍は尾でティラをつかんだ。

ティラは手足をばたつかせて、必死に出ようとするが、ビクともしない。

水龍はティラを尾ごと壁へとたたきつけた。

水の尾は木つ端微塵に崩れて、しぶきをあげた。

ティラは顔を歪めて腹を抱えた。

口の端から血がつと垂れた。

そのままティラは自由に動けなくなってしまった。

「ティラ！」

レイは少女をにらみつけた。

少女は平然としている。

やはり心を持たない神殿のからくじに過ぎないのだろうか。
今回もそうなのだろうか。

レイにはそうは思えなかつた。

レイはそのままぼうつと考え込んだ。

それをいいことに少女は手を伸ばしてきた。

「レイ！」とレアンが一喝すると、レイは我に返つた。

レアンは呪文を唱えた。

すると、地面から植物の蔓が一ヨキ一ヨキと生え、少女の足をきつ
く縛りつけた。

少女はニヤリと微笑みを浮かべると、手でスパツと蔓を斬った。

あまりにも軽々と斬るので、レアンは悔しそうに舌打ちした。

キバは「もう！めんぞい！」といって、少女に突進してそのままキ
バごと貫通した。キバは一瞬鍵をつかんだが、まるで鍵が生きてい
るかのように、するりと手から抜けてしまった。

キバはそのまま転んだ。

水龍が、動きを止めた。

どうやら力をためてているようだ。

「次！大きい技がくるよ！」とカノンは言い、お得意の怪盗技で高くジャンプすると天井に手をつけて、そのまま回転すると天井にべつたりと張り付いた。

レアンも同じように壁に張り付いた。マナは魔法陣に手をつけたまま、移動できていた。

レイはマナの前に立ちはだかると、ティラとキバ、ミルトを呼んで、強力な結界を張った。

青い半透明の壁が、レイ達を包んだ。

水龍は木つ端微塵に水になると、大きな波になり、皆を襲った。大きな波は渦に変わった。

結界は簡単にやぶれ、波にもみくちゃにされた。

渦巻きだった。

レイとキバとティラは簡単に流され、手足をばたつかせて溺れないように必死である。カノンとレアンはその様子を冷静に見つめる。

波はどんどん弱まる、普通の水に戻った。

ティラが水面からプカリと顔をだした。

壁に頭をぶつけたようで、気を失っている。

マナは水の中から出てこなく、そのまま魔法陣を完成させようとしていた。

水は水龍の形をつくり、もぐっていたマナの姿が見えるようになつた。

キバはティラのそばへ寄って、様子をみている。

レイもすっくと立ち上ると、ぶつぶつと呪文をつぶやき、指を向けた。

そして指から放たれる雷光。

みんなはまぶしそうに目を細めた。

雷光にレイの顔が青白くうつし出された。

そして、青白い雷光は少女を貫いた。

少女の動きがしばし痙攣した。

腕が震えている。

少女は雷光にしごれたようだ。

ということは、ただの水ではないのだ。

なにかが混ざっている証拠だ。

不意にマナが叫んだ。

「みんな！ どいて！」

マナは魔法陣を光らせた。

その光はレイの雷光よりもまぶしい。

マナは手に光を宿らせ、そのまま少女に向かって突っ走った。水龍の尾がマナを捕らえようとするが、マナのすばやさは雷光のようにすばやく、水龍の尾は虚しく空を切った。

マナは少女のところへたどり着くと、ニヤリと笑つた。

そのまま右にステップを踏み、少女の攻撃をさらりと避けると少女の顔をマナはむんずと手でつかんだ。

少女は耳を狂わせるような、叫び声を高くあげた。

少女はみるみる顔から足まで石に変わつていった。

少女は全体石になると、床に倒れ、木つ端微塵となつた。

少女が石になると、水龍は体をうねらせ、叫び、苦しそうにしていた。

水龍の動きが止まり、こちらを見据えてから水龍はただの水へと化した。

血しぶきの代わりに、水しぶきがあがつた。

水しぶきはヒリヒリとした感触を残して、跡形もなく消えた。

ミルトは前に進み出で、皿の石ぐすの中から、鍵を取り出し、首へとかけた。

ミルトはざわざわと猫のよつて毛を立てた。

「どうした！？」とキバ。

グルルルルル。

ミルトはのどを鳴らし始め、いきなり一まわりも一まわりもむくむくと、大きく成長した。

みんなは驚愕の顔でそれを見守っている。
さすがのレアンも口をぽかんとあけて、見ていた。

そして、口を閉じ、「ほほう。龍、鍵をもって、成龍となる・・・か。」といった。

まったく意味がわからない。

そしてミルトは成獣となつた。

この部屋はぎゅうぎゅう詰めになり、息をするのも苦しい。
ミルトが体をぐつと伸ばすと、天井の一部が崩れ落ちた。

レイは空を仰いだ。

空はまだ青い。

さて、ミルトはもう誰でも乗れるんじゃないかつてほど、大きくなつてしまつた。

「どうしよう。このままじゃミルトが邪魔で帰りの扉にたどり着けない・・・。」とカノンが苦しそうに言つた。

レイは「ミルト、壊しちゃえ。」とレイの顔の大きさの一倍ほどの、ミルトの耳元でささやいた。
ミルトは小さくうなずいた。

ドームにぎゅうぎゅうになつていたミルトは天井をさらに壊し、みんなをきやあきやあ言わせた。

そしてこの部屋には天井というものがなくなつた。
「キバーのるよー。」とレイはミルトにまたがつた。
またがるのにも時間がかかった。なぜなら、ミルトのウエストはキバの身長ほどあるのだ。

「おう！」とキバはティラを抱えて、ミルトにのった。

「じゃあ。みんなまたいつか。」とマナが空を仰いで、言った。

「うん！じゃあね～。」とレイは大きく手を振り、遠くへ行つてしまい見えなくなつた。

「ちょっと。私も乗りたいのに～。」とカノン。

「じゃあ、僕たちは華ノ国に向かいますか。」とレアン

「あれ？私たちの目的は会つて、情報交換することじょう？」「と

カノン

「私はレイ・ホープに会えただけで満足ですよ。」とマナ。

「また！心にもないこと言つちやつて～！ じゃつ行こうか。」と

カノン。

マナは無邪氣にほほえんだ。

いや、むしろ邪気に。

3章 進歩（前書き）

天空城編、完結です・・・。
でも、ほんとの完結じゃなくて、宇宙編につづります。

3章 進歩

三章 進歩

一 水晶姫

レイたちは風華大陸に舞い降りた。

ティラもすっかり傷が癒えて元気になった。

レイたちは風華大陸を見渡した。

ミルトに乗り、空から島を眺めたところ、島は丸くなつており、その真ん中にクリスタルタワーがそびえていた。

クリスタワーはみごとなものだった。

クリスタルタワーは六角柱の形をしていて、雲の先は見えない。そして、ミルトが空から見上げるほど、ニョキッと空を突き抜けているのだ。

クリスタルタワーの頂上はどこにあるのだろうか。もしかしたら、宇宙に飛び出でているかもしれない。

レイたちは今、クリスタルタワーの前に立っているのだ。

ミルトも地面に降りると、クリスタルタワーの扉に入れるように、白い服の青年に化けた。

門の前には両側ズラリと十人くらいの兵士がいる。その中の一人が声をそろえて言った。

「光の小さき龍、ミルト様御一行、ご到着デス！」

「……す、ぐく、ていねいだね。」とティラ。

「この風華大陸では龍は自由なの。龍は尊敬されるべきものなんだつて。むしろ神って言つてもいいね。……ほかにも龍がいるかもね。」とレイ。

「そうなのか！だからミルトも堂々とここで降りたつてわけか。」

とキバ。

みんな口々にしゃべりながらクリスタルタワーに足を踏み入れた。

扉の向こうには女の子がほほえみを浮かべ、ちょこんと立っていた。年は十四くらいだろうか。

白い縄の服をまとつていて、見た目から貴族を思わせた。

黒い髪色で目も黒く光っていた。

その目はしつかりとこちらを見つめている。

女の子の隣には護衛するような女兵士が立つていた。

「この方は姫の妹、フィナ様でござります。」

「ひんにちは。」とレイが言った。

「・・・・ひんにちは。」

「私の姉さまに会いに来たんだよね？」と女の子

ティラはぽんやりと考えた。

「貴族のような人の団体なのに、しゃべりかたは普通の子と同じだ・・・。教育されてないのかな。」

「うん・・・。そうだよ。」とレイはぎこちなく返事をした。きつと僕と同じことを考えているのだろう。

慎重なレイの口を、フィナの無邪気さはレイをタメ口にさせた。それにして僕の兄貴は何にも気にしてないみたい。

キバはクリスタルの壁や家具を、きらきらした目で見回していた。今にでも壁に頬をくつづけて、スリスリしそうだ。

「いってらっしゃい。」とフィナはレイたちに手をふった。

フィナはそのまま自分の部屋に入り、入ったきり出でこなくなつた。

「・・・では、案内しますよ。」

広い玄関を出て、廊下に出た。

廊下までもが透き通った色をしていて、それがどこまでも続いている。

「水晶姫様とは壁越しで話すことになります。安全のためでもありますし、姫は重い病氣にかかっているのです。姫は今から病死してもおかしくない状態にあります。医師に診てもらつたのですが、病状は悪化するばかりです。」

「そうですか……。」

そんな話を聞いていた中にレイたちは階段を上っていた。階段は螺旋状になつていて、上を見るとそれがどこまでも続いている。

「……で、不吉な話なんですか、姫がお亡くなりになられたら、フィナ様が水晶姫の称号を受け取るのですか？」とティイラ。

「……そういうことになりますね。」

「かわいそだとは思いませんか？そのままどこのにも行かないでクリスタルタワーに監禁されで。」

「……ティイラ！」とレイ。

レイは静かに思った

「ティイラも工場に監禁されていたんだ……。こんな質問するのは当たり前かもしれない。」

「いいんですよ。」と兵士はほほえむとまた話し始めた。

「私もそう思います。フィナ様の世話役として。フィナ様は早くに父様と母様を亡くしました。だから、ここを出て行つても、悔いはない。やり残したことも。むしろあなた達の旅のお供に連れて行ってほしい。……でも、そんなこと危険です。」

「まあ、そうですよね。」とレイはその話題を流すと、女兵士に見られないように、ティイラに口パクでしゃべりかけた。

「この問題に深入りするな。そんなことしたら、計画が。」
ティイラはこくんとうなずくと、口を開じた。
しかしティイラは思った。

「でも。」

螺旋階段を上りきると扉があり、その向こうから咳き込むような音が聞こえた。

「どうしましたか。ミルトさん。」

扉の中から透き通った声が聞こえた。

「…………」「

ミルトは黙りこくっている。

ミルトはレイの方を横目でちらりと見た。作戦の実行の仕方がわからないらしい。

「水晶姫を人質にとつても意味はないよ、ミルト。人質にするなら・・・気が引けるけど、フィナさんだよ。」

（ そう。いつ、実行する？ ）

（ 明日ね。後でティラ達にも話そつ。 ）

（ 今は、鍵の話でもして・・・。 ）

（ そうして、ようしけ。 ）

「水晶姫様。私は二つの神殿をまわってここまで、なぜか急成長しました。いまでは誰でも背中にのせることが出来ます。」

「そうですか・・・・・・。では、

で

（ なのでしょう。私としては

「。

で

レイはぼんやりとしていた。

水晶姫の話は長すぎて眠くなつてくる。

ティラもそのようだ。

しかしミルトは話をしっかりと聞いているよつだ。

そして、キバはもつとひどい。

立ちながら口からよだれをたらし、寝ている。

まさに神ワザ！！

「神殿は龍を拝む、聖なる場所です。だからこそミルトさんはここ

まで急成長できたのですよ。」

水晶姫はようやく口を閉じた。

話しが終わる頃には、空は真っ赤に染まっていた。

沈もうとしている太陽はりんごのようだつた。

「今日はもう暗いので休まれていってはビリでしょ。」

「待つてました……」とレイは心の中で叫んだ。
「ようこんで！」とレイ一同は声をそろえて言つた。

レイたちに案内されたふたつの部屋はやはり、一面のクリスタルであつた。

「うわー！僕と兄貴は！」
とティラはうれしそうにはしゃいでいる。

「うん。」

レイは一人に手招きをすると、耳元でささやいた。

「明日の作戦のことなんだけど。人質はフィナさんに決定。深夜3時に実行する。しっかり仮眠をとつときなさい。」

キバとティラはこつくりとうなずいた。

しかしティラは悲しそうな顔をしていた。

そのわけはやはり自分に似たフィナさんがかわいそうなのだろうか・
・。

深夜一時。

レイはサイレンの音で目を覚ました。

一瞬何が起こっているかわからなかつた。

レイと少女の姿をしたミルトは扉から飛び出ると、あたりを見回した。

「何が起こっているの？」

紅い光がぐるぐると回つて、クリスタルに反射し、目がくらんだ。昨日の世話係の女兵士さんが呆然と突っ立つているので、何が起こつているのか聞いてみた。

しかし兵士は「……フィナ様が……」といい、あちらへ指を刺しているだけだつた。

レイはその方向へ目をやると、フィナさんが窓辺に立つていた。その表情はおびえているのか、笑つているのか、無表情なのか、わからない。

そのとなりには、ティラが立ち、そのとなりには、歪な仮面をかぶつたキバが立つていた。

歪な仮面は真っ黒に染まつてあり、金糸で洋風な装飾が施されてあつた。

キバが着ていた和服は真っ黒に染まつた鎧となり、それもどこか洋風であつた。

仮面からのぞくキバの口は笑みも浮かばない、無表情だった。

キバはフィナさんを抱き上げると窓から飛び降りた。

フィナさんを心配する人たちが一斉に悲鳴を上げた。

「キバ！ ティラ！」

レイはとつさに叫んだ。

しかし、叫んでも何も起こらない。

ティラはレイを見下ろし、何も言わずに窓から飛び降りた。

レイは仲間を一人も、失つてしまつたのだ。
レイの頭の中にいろいろな考えが走つた。

それは裏切りなのか・・・。

それは意図的なのか・・・。

それは終わりなのか・・・。

それは始まりなのか・・・。

・・・何なのだろう。

固まつたレイを心配そうにミルトが様子をうかがつた。

(レイ・・・。やはり、これだから人間は信用ならないのだよ。)

レイは床に座り込み、縮こまつていた。

世話係の兵士さんも心配そうに見守つている。

ミルトは考えた。

(これから罰をあたえられることはまず、ない。私の世話係として、水晶姫もレイのことは認めているのだ。罰を『えられても、殺されることはないだろ?。前向きなレイなら、すぐ立ち直るはずだ。しかし、天空城の行き方はどうやって聞き出せば・・・?)

ミルトが考えている間に、レイは兵士に腕をつかまれた。

ミルトはレイに手を伸ばしたが、世話係の兵士さんに止められた。
「今からあの人は水晶姫様のところへと運ばれます。きっと、一年牢屋で暮らすはめになるでしょう。ミルト様はあの人人が復活するま

で・・・・

「え・・・・そんな！－！」

「水晶姫様はお怒りになられたら、きっと彼女を死刑にするでしょう。ミルト様、今はじっと我慢です。あなたはその間に、神官となつて働くことになるはずです。その間は私の言うことをしつかりきてください。彼女を死刑にするなんて、させませんから」

ミルトは一瞬だけ女兵士を前から知つてゐるような気がした。面影・・・動作・・・誰かに似ている。

でも、誰だろう。

言葉遣いは何か違和感がある。
顔にも何か違和感がある。

「もしかして・・・あなたは・・・いやつ、あんたは！」

女兵士はふふふと笑つた。

そのころ、レイは

「こんなことが起こるなんて・・・・・。」

水晶姫はか細い声で言った。

「・・・・・。」

レイは何も言わず固まつていた。

しかし、すこし精神的に光が見えてきた。

「そう・・・・・これは始まり。」

「あなたは龍の数少ないお世話係です。死刑にするわけにはいきませんね。しかし、行動によつてそれは変わりますよ。行動といつても、クリスタルタワーの牢屋生活ですが。」

そしてレイは牢屋にぶち込まれた・・・・。

レイは笑みを浮かべた。

どうやつて脱獄するか考えていないが、レイの胸からは希望が湧き

出るようだつた。

私はミルトも失つてしまつた。

もう、仲間はいない。

一人だ。

しかし一人ではない。

ミルトとも、キバとも、ティラとも、つながつてているのだ。

また、会える。

いつか、会えるのだ。

レイは足音で目が覚めた。

カツカツと音をたてて、近づいてくる。

この音からして、一人のようだ。

その足音はどんどん近づいてきて、レイの前の牢屋で足を止めた。いつのまにか牢屋内は霧のよくなもので包まれていた。

「誰？」

「誰だと思つ~？当たつたらひるみよ。」

気の抜けたような声だった。

この声は間違いない。

「レアンー？」

「あらつ？意外に正解。」

とレアンは顔をのぞかせた。

「脱獄させにきたよ！このままだと運命が狂つてしまふ。君が一人になるのは計算済みだつた。ミルトはカノンに任してあるから大丈夫だ。さあ、天空城へ今すぐ行つて来い！そしてつかまれ！そしたら、あの子たちがくるから。」

とレアンは鍵で扉を開けて、レイに方位磁石を渡した。

レイは方位磁石を眺めた。

ガラス球のような形をしていて、中には紅い矢印が窓を示している。

レイは方位磁石を振つてみた。

「これ、壊れています？」

「あの子たちつて？」

レアンはレイを無視して話を続けた。

「その方位磁石は天空城を示すものだ。そして、俺がつくれたものだ。」
とにんまりと笑った。

「君つて何者なの？」

「神様だよ。運命の神様。ふふふ。」

「うそ。」

とレイは言つと窓を開けた。

冷たい風が頬に当たる。

銀色の髪が風になびいた。

「よく、わからないけどありがとう。」

レイはそのまま天空城に向かつて走り出した。

「ちゃんと敵につかまれよ！」とレアン

「よくわからないけど・・・まあ、つかまつたらつかまつた。でも、つかまる気はない！」

レアンはレイを適当に見送ると霧と一緒に消えていった。

「さあ、おもしろくなってきた。」

今、何かが空で光った。
気のせいだろうか。

「！？」

上をみても曇つた空が見えるだけだった。
何もない。
レイは疲れ果てて、その場に寝転がった。
空を見ていると曇天でも心が落ち着いた。

こわれたか。
上をさしている。

レイはかなりの道のりを進んだ。
山を三つ越え、町も五つ越えた。
今、場所がわからず、草原に一人ぼくんと立っていた。
レイは方位磁石をのぞいてみた。

いや、気のせいではない。

殺意むき出しでこちらへと落ちてくる。

レイは立ち上がり、剣を手に取った。

その目に見える光る物は地面に着陸すると、こちらをにらみつけた。黒いフードで表情はわからない、しかし動作は魂のない人形のようだった。

その男は言った。

「お前は、負ける。」

「天空城の人？ 負けないよ！」

男は鼻で笑った。

男は音の速さといつてもいいほど速さでいつのまにか、レイの目の前にいた。

「ひい！…」

レイは思わず悲鳴を上げた。

レイは男に殴られ、一発で倒れた。

「・・・・・」

男はレイを担ぎ、地面から浮かび上がった。そして、そのまま上へ上へと上つていった。

雲をつきぬけ、晴れ渡る空に出た。

空には城。

城というよりは空飛ぶ船艦だった。空の海を悠々と泳ぐ、船そのもの。

船といつても今までに見たこともないほど大きく、戦争のために

ある船のよつだつた。

男、ギームは船に着陸すると、マナが笑顔で待っていた。いつも秘書がマナに付き添っている。

「おかいり。ギーム。さあ、レイ君を牢屋に閉じ込めてくれ。」

「了解。」

と一言だけ言つとギームは牢屋にレイを連れて行つた。

牢屋はこの船の一一番下の階にあつた。

龍やら月族やらがうじやうじや収容されているところだ。

しかし、月族はもう全員死刑となつた。

今では一匹の龍だけが収容されている。

光の龍、コーンである。

ギームはコーンの向かい側の牢屋を開けると、レイを入れ、鍵を閉めた。

「・・・・・。」

「この男の妹か。」

翌日。

レイは目が覚めた。

牢の中だ。

レアンに言われたことをやりきつた。

しかし、彼は味方なのだろうか。

・・・これ以上考えないようにしてよ。

向かい側の牢屋からは獣の息遣いか聞こえた。
何が収容されているのかは、なぞである。

しかし、何か威圧感が感じられた。

数時間後。

向かい側の人は寝てしまつたのだろうかいびきが聞こえた。
いつ助けがくるのだろうか?
あの子たちとは何者なのだろうか。
レイは虚空を見つめた。

希望は　まだ　消えていない。

天空城編
完

リク・フラン

黒髪の好奇心旺盛な六歳の男の子。目が

銀色。

口ボ

か、平和主義。

目が淡い青。

レアン

カノン

レイ・ホープ

ティラ

キバ

ミルト

絵本の主人公。

闇を創ったモノ。

暗黒騎士。洗脳されている。

光の大龍。

マナ

リム

ヴァッシュ

シユ

リクに優しい正体不明の子。

マナの親友。

龍騎士の男。

闇
ゲーム

ティラの怪物。

闇の溶媒。

銀髪の少女が死んで989年後。

技術は大幅に進歩し、人々は宇宙に侵略の手をのばした。世界は決して平和ではなく、国の域を広めるために宇宙戦争が始まっていた。

その戦争は決して血は流れるとはなかつた。

ロボットがぶつかり合つ見苦しい戦争であつた。

歴史が狂つてゐる。

その混沌の中 一人の男の子が救世主として、立ち上がつた。

四章 魔導童話

私は大図書館で真新しい本を見つけました。

紅い表紙に龍の絵が描かれていて、とても興味のわく本です。

昔、昔、あるところに 銀色の少女がいました。

その少女は美しくも、穢れた月族の子がありました。

忍者と少年と龍を引き連れ、旅に出た少女は水晶姫といつ怪物のような女に出会い、

少年と忍者に悲しくも裏切られました・・・。

彼女は水晶牢に入れられ、嘆き悲しんだ。

「なぜ、こんなに暗いの？」

「なぜ、あかるい世界は用だけに暗いの？・・・冷たいの？」

その暗い中、運命の神にてをさしのべられ、彼女は救われました。

「あなたがここで死んだら、破滅の道へと進むのですよ。」

「まあ、立ちなさい。戦つて勝つのですよ。」

彼女は怒りと復讐に燃え、闇という怪物と戦いました。

華麗に戦つも、無残に散りました。

彼女はひとりで孤独でした。

だからこそ、彼女は死んでしまった。

彼女に仲間がいれば、この錆びた世界はないのかもしない。

銀色の光は赤黒く染まり、光は消えました。

「ひいて魔導とこうものば、闇の腹の中へと消えました」と

めでたし、めでたし。

あれ・・・?

私は本の最後にはさんである、メモをみつけました!
・・・何も書いていませんね。

あ! わかりました!

暗ぐすると、文字が浮き出るのですね?
なになに・・・?

これは現実にあつた話です。

だれか、この銀色の少女を助けてあげてください。
助けるのなら、僕のとこに来てね!

本を読んで、

989004731.

そうすれば、静かに道は降りるでしょう。

猿でもわかるはずです!

一刻も早く来て!

私は猿以下といふことですね。

この暗号はなんて意味なんでしょう・・・?

あれ！？最後になんか書いてありますね・・・。

作 レアン兄妹

レアン兄妹ってだれ・・・？

こんなに真新しい本なら生きているはずですね。

ふむふむ。

暗号の意味もわかつちゃいました。
さすが私の電子脳。

そう。私は ただ一人の 意志と心を持った、ロボット。

4章 魔導童話（後書き）

ここからまた新しい話が始まります。

五章 宇宙のハザマ

一 出航

暖炉の炎がパチパチと音をたてて、燃えている。

リクはふかふかのソファに座り、のんびりと昼寝を楽しんでいた。ひざの上には大好きな本がどっしりとのっていた。

題名は魔導があつた国。

男の子が奪われた魔導を取り戻すために旅に出る話だつた。

リクはSFやファンタジーが大好きだった。

リクは本を読んで、タイムトラベルやロボットといつもの興味を持つていた。

ロボットというものはもうとっくに完成されていて、戦場で活躍しているが、タイムトラベルマシンというものは開発されてはいるが、まだ一回も実験に成功したことはないといつ。

「リクー！本を返さなきゃいけないんじゃないの？」

母の声が耳の中に入ってきた。

耳障りだけど、本は返さなきゃ。

リクはぼんやりと目をこすつて、返事をした。

「わかつてるよー。いつへくるね。」

「いつてらっしゃい。」

リクは黄色いリュックを背負つて、緑色の表紙の本を抱えて外へと出た。

外は一面の青い空であった。

しかしそれは幻にすぎない。

本の中で青空というものが書かれていたけれど、リクは本物を知らなかつた。

いつか宇宙船に乗つて、地球に降り立ち本物の青空をみるとことがり
クの夢だつた。

この宇宙都市では人間でも息ができるようにと、円形型で透明の
ドームが張られていた。

ドームでは朝と晝に青空や雲り、雨、雪、などの天気を映し出した。
夜は透明のままで宇宙の空や星が見られた。

リクは公園を突つ切つて、大図書館についた。

大図書館は本ならなんでもそろつていで、ない本はないような図
書館であった。

しかし、大図書館の中は迷路のように入り組んでいてなかなかでら
れなかつた。

この図書館は子供達の間で「不思議の大迷宮」と呼ばれていた。
理由は僕が飼つていた電子ペットのソウルとはぐれて、そのまま帰
つてこないからだ。ちなみに、ソウルという名前は形からそのまま
だ。

「よし、今日は歴史本でも借りようかな。
リクは自動ドアの前に立つた。

「・・・・・。」

開かない。

今度はじたばたしてみた。

「・・・・・。」

やはり、開かない。

リクは背が低く、感知してくれないらしい。

「あら？ 坊ちゃん、びいしたの？」

つばつきの帽子を深くかぶった、女の人が声をかけてきた。
その女人人は自分の顔を他人に見せないようにして、帽子をかぶつ
ているようだつた。しかし、まったく悪い人には見えない。
帽子からはみでている、髪の毛は目立つきれいな金髪だつた。

「・・・。あっ、すみません。なんでもないんです。」

自動ドアが開いたので、さっさと行こうとしたら、女人人はリクの
手を逃がさないようにつかんだ。

「そう、いそがないでよ～。坊ちゃんは冒険ものの本、好きかしら
？」

リクは田を輝かせて返事をした。

「はい！ 誰よりも好きです！」

「・・・（一矢弓）。面白い本があるんだけど、一緒にみない

？」

「いいんですね！？」

リクはそのまま女人についていつて、魔導絵本コーナーのずっと
ずーっと奥深くまできってしまった。

そして、女人人はある本棚の前で止まつた。

怪しげな絵本がずらりと天井までならんでいる。
リクはひとつこの本を手にとつて、ひらいてみた。

「989」

そこには、銀色の少女の絵が描かれていた。

少女の田はリクの田と同じように銀色であつた。

挿絵であるのに、銀色の少女の田からは半端ではない光にみちてい
て、きれいであつた。

しかし最後の絵は

血にまみれた少女の絵が描かれていたのだ。

「ひい！」

リクは急いで本を本棚へと戻した。

「その少女は私のともだちなの。彼女を助けるためにはどうしても、子供一人が必要だったわ・・・坊ちゃんは協力してくれる？」

「はい・・・・・。しかし、内容によつて・・・・・。」

「いいの！？ありがとう！！」

「・・・・・。」

この人、聞いていないみたい。

まあ、やつてみよう。

「でも、昔の人のことどうやつて助けるんですか。」

「・・・・・。誰にも、今からやることはいわないでね。」

「・・・・・。はい。」

やつぱり、聞いてない。

僕は口をぱつくつとあけた。
本棚がずるずると左へとずれて、入り口ができるのだ。
女の人はリクに一礼して、帽子をとった。
彼女の目は血のような真紅色の目であった。

「申し遅れましたが、わたくしの名前は カノン と言います。
「ぼくはリク。リク・フランといいます。」

「よろしくね。」

とカノンはにっこりとわらつた。
リクにはそれがとても輝いて見えた。

「レアン！ 入るよ！ 新入りだよ～！」

「おお！ それはそれは。」

えらく氣の抜けた声が聞こえた。

「あら～～銀色の田のお子さんだね～。・・・似てるね。」
レアンといつ男は、金髪に真っ赤な血の色の田を持っていた。

レアンは優しそうに見えたが、目には鋭い光が宿っていた。

「ほら～、君のお友達でしょ？」

部屋の中から、てててててつといつ足音が聞こえた。

見覚えのある青い光がリクに飛びついてきた。

「きゅ、きゅ。」

「ソウル！ ！ どこ行つてたんだよ～！ もう～。」

リクはソウルをきゅっと抱きしめた。

ソウルはうれしそうにしつぽをふつた。

「帰つたらなにか食べよ～な。」

「きゅ～。」

「・・・・・感動の再開つてといろかな？」とカノン。

「さあ、見つかる前に速く入つて。」

レアンはリクの背中を押して、無理やり入れた。

「ひんにちば。私の名前はロボ。」

真っ白な女の子がこちらに顔を向けた。

「・・・・。」

リクは女の子に見とれてしまった。

彼女をずっと、ずっとと前から知っているような気がしたからだ。

「不思議ですね。あなたを見ていると、久しぶりな感覚がします。」

「うん・・・・。ぼくもそう思った。」

「んふふ～。それはね？ ・・・・まあ、いつかわかる日がくるよ。」

「

とレアンが怪しげな笑い声をたてた。

「さあ。ぼくの計画をたっぷり聞かせてあげるよ。でも、これは誰にもいつてはいけない。どんなに親しい人でもだ。」とレアンは真顔で話した。

「お母さんでもだよね。わかりました。ぼくけつこづかたいほうだから。」

「いいこだね。」

優しそうな台詞とは裏腹に、目はとても真剣であった。
そんなに銀色の少女はたくさんの人々に愛されていたのか。
リクはとてもそのことに会いたくなつた。

リクはロボットのとなりに座ると、カノンはレアンの隣に座つた。
「君達、タイム・トリップ・マシンというものを知つてゐるかい？」

「うん。よく、小説にでてくるもん。」

「わたしのお気に入りデータに保存されています。」

「実はぼく、それを開発してしまつたんだ。リク君には悪いけど、ソウル君で実験済みなんだ。」

レアンが言つ「開発した。」は「盗んだ。」に等しい……。

「ええ……ソウルが！（でも……無事でよかつた。）」

「タイムマシン使っちゃダメ！つて法律に書いてあるけど、ここでは大丈夫。誰もここのこととは知らないからね。しかも、ここは図書館を造つた人もグルだ。」

そして、君たちにぼくが設定した時代へ行つてほしいんだ。だめかな？」

「唐突に言われても……ねえ？ロボさん。」

「いいえ。私は行くわ。一人でも、行く。」

「ええ……そんなあ。」

そうじつていのうひに、カノンに手首をつかまれ、連行されていた。いつのまにか、真っ暗な部屋にでた。

その部屋の中でレアンの声が響く。

「君達にやつてほしいこと。それは、牢獄に入っている銀色の少女を脱出させること。ただ、それだけ。牢獄の檻はロボが破壊してくれるはずだから。破壊したら、すぐ帰つて来い。操作は全部ロボが運転するから、いじるなよ！」

電気がいきなりついた。

田の前には白衣を着た、科学者がわらわらいて、リクはびびった。ひとりの科学者が大声をあげた。

わらわらしていた、科学者が分散すると、田の前には「豪華で壮大な」とはいえない、「貧相で小さい」ロケットがあった。

「タイムマシン、出発準備！」

すると科学者はわけのわからない機械の前に座り、いろいろなキー ボードをいじくりました。

天井がゆっくりと開く。

（こんな公な場所でやつていたらばれるんじゃないかな。）
トリクは不安になつた。

「さあ、速く乗れ！」

レアンに背中を押されて、リクはロケットそのままの形をした、タイムマシンに乗り込んだ。

ソウルは興奮した様子で、リクの頭の上ではねをパタパタさせてい る。

グイイイイイイイイイ。

パソコンを起動させたよつた音が轟音となり、響く。

「ベルトをしめて。」とロボ。

リクはいそいでシートベルトをしめた。

ロボは方耳にイヤホンをつけた。

「準備完了です。」

「わかりました。じゃあ、カウントダウン。」

5 4 3 2 1 0

ものすごい轟音が続いた。

出発したのだ。

船内はぐらぐらとゆれ、リクは気持ち悪くなつてきた。

「つう・・・。」

「あ、そうだ。あなたは素人だったか。ちょっとの辛抱です。大気圏をぬければ、素人でもダイジョウブなシステムですから。」

そしてこのまま、ひとつ前の「貧相で小さい」ロケットは宇宙へと飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8184/>

Sky Soul

2010年10月10日05時42分発行